
Dies irae -**駆ける、現人神の刹那**-

マキナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i e s i r a e - 駆ける、現人神の刹那 -

【Nコード】

N 1 5 6 4 Y

【作者名】

マキナ

【あらすじ】

彼の渴望 総てを模倣し、全てを凌駕するがために己が渴望を満たすその所業は神のもの。他者を模倣したがために己の罪を背負いつつも、崩壊するはずの世界を救うがために並行世界を駆け巡る、これは現人神へとなった一人の青年の物語。

序章 第一話「回帰」（前書き）

どうも、R-18で投稿してた水銀です。突如として大変迷惑をか
けますが、年齢制限を解除すべく変更しました。

ユーザーに読者の方々には迷惑をかけますが、どうぞご了承ください
お願いします

序章 第一話「回帰」

永劫回帰。

無限に繰り返す 螺旋。永劫終わることのない回帰の渦。その奔流に飲み込まれ、永遠に払拭することができない既知感で満ち足りている世界。

既知感に蝕みを受け、永劫既知しか感じ取れない虜囚がいた。その男は救いを求めるが如く、永遠繰り返し繰り返し、そして無限の果てに狂った座の男。

しかして、この男が真に渴望するのは、まさしく己が生み出したこの世界の超越と破壊、そして女神に捧げる愛を示すため、救うがために動いているということに他ならない。

黄昏の浜辺で悠久の時を永劫留まり続け、停滞の世界に座す少女を救いだし、そして彼女の手で抱かれる（殺される）ことが、彼の望み。

その切望、その渴望、その葛藤。そして……なんという究極の愚直にして馬鹿なのだろうか。

これらが故に男はこの蛇の神に対して、それなりの敬意を払っているのだ。現人神としての坐に座す水銀は確かに狂っている、それは否定はできない事実であるが、同時に一途ともいえるからだ。

だからこそ、

「ああ……なるほど。その渴望は永劫繰り返し満足できなくてはまた幾千の時をまた同じことを繰り返すということか。幾星霜繰り返し、女神による断刀刃で斬首を希うとは、皮肉なものだな。マルグリットに出会うことでおまえの運命は既に定まっていたというのに」
そして、と男は付け足し、

「黄金の獣、破壊の君との邂逅もまた然り。出会うべくして出会い、それ故にお前は永劫回帰の環から抜け出せずにいる……」

哀れむように、慈しむように、称えるように、それでいて懐かし

むように見据えてから瞼を閉じ、

「なら……いいだろう。ここから先の戦はお前たちにとっては皮肉にも奴が流れ出させた世界で奮闘する道化ということなら、尚のこ
と俺が止めを刺してやる。涙を流して称えるよ英雄ども。まあしか
し、俺にも事情があるんでな。そこにいくまで、せいぜい半世紀を
過ごしているんだな。それまでは……罰当たりな娘、マルグリット・
ブルイユよ。俺も汝に慈しみの加護があらんことを、エイメン」

十字を切ってから男は身を翻し、その背後で歪み、そこから覗か
せる“世界”を見据え、

「救済するまえに、やることを総て済ませてから参陣させてもらう。
この模倣の神、デミウルゴス・ボイマンドレース。現人神黒井和哉
がな」

そう呟くようにして言葉を残し、その男は姿を消していた。

そう、これは模倣という稀有な渴望を有し、神格された一人の青
年の紡ぐ物語なのだ。

序章 第一話「回帰」(後書き)

本当に申し訳ありません。こちらの都合で急遽変更したことに
関して、誠に申し訳ありません。

2011/11/23 修正しました。

第二話「怒りの日」(前書き)

どうも、マキナです

第二話「怒りの日」を投稿したいと思います

第二話「怒りの日」

黄金の獣。破壊の君。髑髏の王。墓の主。

そう比喻される男がいた。異なる世界、並列世界において、その男は他者を一際抜きん出ており、その実力、カリスマ性、そして何よりその容姿も総てが異なっていた。

万能すぎるその男は、かつてはナチス・ドイツ政権時において斬首官として名高く、当時においてある意味で恐れられた男、ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ。

現人神である彼が垣間見た並行世界においても、彼ほどの逸材もそうはいない。指揮官としても妙技、その卓越した実力。普通とは明らかに比較もできないほどに超越している破壊の光。

彼が胸に抱く渴望もまた王としてのそれだ。全力を振るったことがない。いや、振るおうとしても全力など出せば灰燼となる。それだけに、彼の生涯はつまらなさを帯びていた。

しかし、さることながらそれを成就させるため、そして彼が今現在蝕まられている法則を唾棄するため、獣の軍勢を率いているのだ。元々首切り役人がなぜ魔道に堕ちたか……それは語るべきもない、そう括ることができる。

詐欺師との邂逅、これがすべての始まりであり終わりの終末点にして終着点、帰結するべき座標なのだ。

奴と出会い、その接触によって己を引きずり込み、やがて破滅させる自滅因果となったのだ。

奴は誰よりも自制に長けていたはずだ。しかし、詐欺師との出会いによりその渴望を、全力を発揮させるがために彼の水銀と盟約を結んだ。故に、奴は総軍を率いる魔性の君へと変貌したのだ。

無為だと遠ざけ、塵芥だと烙印を押して通り過ぎ去った。本当は総てを愛してやりたかったはずなのに、愛するには森羅万象万物総てが脆すぎた。儂すぎたのだ。抱擁どころか柔肌を撫でただけで碎

けてしまう硝子のような繊細さ。

ああ、なんとたる無情。森羅万象、幾星霜この世は総じて繊細に過ぎるのならば、奴が誇る愛は真の破壊の慕情。愛でるためにまずは壊す。壊すことで己の愛を示す。そしてそれは、すべて等しく平等に振り分けるのだ。頭を垂れる弱者も、傳いて跪く敗者も、反逆を目論む不忠も、総てが黄金の獣にとつては愛しいのだ。それ故に破壊する。

そうだとも、これこそ悲劇の幕開け。一人の斬首官が一人の詐欺師との邂逅がきっかけであり、定められたことであるのなら、抜け出すためにはその詐欺師を止める必要がある。

ならば

「怒りの日は彼の日なり。終末の時を迎えるがために総軍を、獣の軍勢を率いるラインハルト・ハイドリヒではなく、その根源たる双頭の蛇を斃す必要がある。だが、奴も事実上の現人神。並大抵では死なないし、奴のあの回帰がある限り、無限に繰り返させることになる。それを防ぐには……」

己もまた、その蛇を打倒するための力をつける必要性がある。元来、神を斃すのは人だ、つまり人間だ。神によって生み出され、神の盤上で踊り続ける道化。だがしかし、古今東西天上の神を殺し、打倒してきたのも同じ神々、そして人の手によるものが多い。

ならばこそ、

「そうだとも……獣よ、そして水銀。お前達を必ず俺が解放させてやる。その力も、この俺が模倣してやる。だから、その座にてとくと見ておけ」

漆黒のマントを翻し、両手に嵌めた白き手袋に魔法陣が刻まれ、首元にはストラが垂れ下がっており、まるでその黄金の獣を模した格好の男は双頭の蛇が巻きつく世界を睥睨してから、

「では……本当にこれではらく見納めだ。クラフト、ハイドリヒ。そして……」

次元の歪みに入る一歩手前で小さく、彼の女神の名を小さく呟い

て消えて行った。

第二話「怒りの日」(後書き)

次回、主人公設定を投稿する予定です

設定（主人公）（前書き）

今作品の主人公の設定を送りたいと思います。

設定（主人公）

黒井和哉くろいかずや

年齢 - 20

身長 - 175

体重 - 65

視力 - 6.0

容姿：整った顔立ちに鋭い目つき、艶やかな黒髪に黒き双眸。

色：黒・白・銀・赤

本作品の主人公。

身丈は高く、卓越した戦闘能力を有し、達観したものの考え方、戦術・戦略など幾多モノ幅広い情報に知識を有しているため、状況に応じて対応できるほどの柔軟性も兼ね揃えている。

人の身でありながら神格化された現人神。本来、現人神とは「人であり神でもある」もしくは「神が人の姿で下界に出ている時のこと」を指し示すが、その定義とは異なり、この世界の場合、人の身でありながら神になるほどの実力を持ち合わせ、超越した存在のことを指す。神格化された現人神には神へと昇格した際の恩恵として、一つの願いを叶えることが許され、そして現人神……黒井和哉は己が起源から来る渴望「模倣」によって、平行世界に存在する主人格を取り込み、己と同化・同調させること。そして、それ故に彼は総ての世界にその人物へとすり替えることが可能となった。だがしかし、これによって黒井和哉はその人物たちを抹消してしまったことへの後悔の念を胸に抱き、己を許されぬ虜囚と比喻している。

加え、和哉は並行並列世界の己自身も取り込んだことで、単一で既に同じ己が幾多もいるということになり、仮に神格の己が死してもまだ己という個我と複数の魂がある限り、神格化された“黒井和哉”は生き続けるということになる。魂の円環法則から既に脱却しており、これはマルグリットと同様に既に異常の存在、すなわち流

出位階まで到達した求道型の魂ということになるので、他の法則に縛られることはない。

「異能」

異能与される能力「模倣」は、文字通り他者の渴望、能力、武器、性格などを取り込み、己が中で変革させ、自己を異界にすることで世界法則を、自己を起点として発生させることができる。よって、彼が一度でも視た、感じたのなら、それが例え事象であれ異能の特異中の特異であろうと発現することができる。この「こうなったらいいな」「こうなりたい」という二重渴望は起源から帰来するものであるため、求道型の魂を保持しながら霸道型の流出へと到達しているという二重の矛盾を有しているということになる。

「武器」

武器としては、現人神でなくとも徒手空拳で既に神秘を起こせ、なおかつ達人級アデプトの実力を有しているので必要は要らないといえられないが、敢えて彼が獲物とするなら神器と化した日本刀に二丁拳銃、そして陰と陽とで対と成す干将莫耶が彼の主流ともいえる。

しかし、先の上記で述べたとおり、彼が世界を既に視て歩き回った中で、同じ世界でも異なる並列世界の能力を有しているので、既存の技能は既に彼の能力と化している。

触れた対象はAランク相当の宝具になり、己を雷にも焰にもすることができ、指の摩擦による遠距離の炎遠隔操作も可能である。特に、錬金に自負があり、無から有を、錬金術においてその絶対法則を無視した業を行使することができるのだ。

元々は我流で身に着けた基礎のスペックがあり、神格化されたことで魔法の真似事もできる。その内に渦巻く総軍に匹敵する魂はまさしく囚われの少女、マルグリットと同等であり、それは上記で説明した通り、並列世界の主人格たちを取り込んだことで強化されたということ。

また、神格化されたことで極僅かな者しか数百万人に1人の「王の資質」を持つ者しか身につけることができない覇気、霸王色の覇気を有することになり、その覇気は歩くだけで絞った対象にのみ気絶させ、一睨みしたり素通りするだけで、一定の実力者以下の生物を気絶させる。

武装色の覇気、見聞色の覇気も使用することができ、概ね彼が纏うのはこれらである。

設定（主人公）（後書き）

次回、第三話「無限の影」

すぐに投稿しますので、申し訳ありませんが、どうぞ良しなに

第三話「無限の影」(前書き)

どうも、マキナです

先の説明通り、R-18で投稿していた作品を、年齢制限にしたことを、誠に申し訳ありません。

第三話「無限の影」

まず第一に、闇が広がっていた。

そう。それは比喻でもなんでもなく、本当の意味で闇が広がっていた。

次元の空間を闊歩する中、狭間の空間から湧き出てきたその凝り固まったかのような闇がぞろぞろと這うように周囲に展開していた。本来ここは異空間であり、次元の狭間をそれも特別奇特なモノでない限りは干渉はできないのが道理。だが、

「……なるほど。この闇、人の想念と怨念、そして人の負の感情が炸裂して無限分裂していったモノ」

既にその存在に思い当たる和哉は、睥睨してからそう小さく呟いてから、

「ハートレス……しつこいことこの上ない。無限に跋扈しているとはいえ、この次元と次元との空間まで干渉してくるとは。外なる神でもあるまいし、地平に棲息していればいいんだよ」

鬱陶しそうにそう嘆息してから、首から垂れ下げてあるストラに少し撫でるように触れてから、再び闇に視線を向け、

「邪魔だ。どけ」

一言。

たった一言。それだけで彼の周囲から尋常ならざる莫大な気が放出された。その放たれた気にハートレスたちが触れた瞬間、弾かれたかのように吹き飛び、同時に霧散していった。また、動かずともその気の余波で固まっていた集団は瞬時に音もなく消え去っていた。心なきモノ、ハートレス。人の心の負によって生まれた闇の産物。それは人という神の生み出した脆弱な玩具が生ませてしまった癌。ならば……

「それを払拭するのもまた神の所業。いや、現人神である俺にとつての冤罪か。ああ、分かっていると。償ってやるとも」

淡々と、それでいて自制するように瞼を閉じていた和哉は、徐に両目瞼を開くと、そこには黄金の双眸を覗かせていた。

「いいぞ……来い。どうせ他世界に行く途中だったんだ。モノのついでだ、掃除をしてやる。今、ここで消してやる」

瞬間、それが合図だったの如く闇の固まりが無数に散らばり、一斉に襲いかかってきたのだ。

孤立無援。絶体絶命に思えるこの状況。だがしかし、

「甘く見るなよ、この身は現人神だ。おまえ等のような雑魚と一緒にするな」

そう侮蔑を吐き捨てると同時に、懐に入れていた二挺拳銃を、白と黒の陰陽銃、相克する禍々しい魔銃が握られていた。

二挺の拳銃の銃身を真正面に定め、その瞬間にトリガーを引いた。炸裂する銃弾の嵐。一発一発が魔弾であり、その銃弾が過ぎるだけで消し去るほどの禍々しい高威力を内包している危険度はまさしく凶器そのもの。

だが、それと同時に鮮麗されたその射撃センスに精密さは荘厳ささえ感じさせてしまうほどだ。

一発、また一発。

放たれる銃弾が闇の固まりを一筋の閃光として消し飛ばし、すかさず向かってくるハートレスを反撃を許さぬ速度で撃ち抜いていた。

二挺による両手打ち。間髪入れずに対象を撃ち抜く必中率は高く、超高速の連射撃ちは到底真似できぬほどに鮮麗され、なおかつ驚異。そしてなにより、ハートレスに感情などはない。そしてなにより、命を持たぬ疑似生命体。動いているのも、それは光を、魂を欲するがため。ならばこそ、加減は不要。

二挺の拳銃を器用に使いながら敵を葬っていく中、背後から数体のナイトソルジャーが襲いかかっていた。

前方を視ている和哉の死角を突いた完全なる奇襲。気配も感じさせない暗殺者は、そのまま現人神の首を刈る、その寸前、

「……舐めすぎだ、ハートレス風情が」

侮蔑の言葉と共に背後のハートレスの背後から無数の弾丸が貫いていた。なぜ、などという疑問さえ抱かせる前に霧散したハートレスを尻目に和哉は前方に跋扈する闇の軍勢を前にして嘆息し、

「仕方ない……跳弾を使用したんだ。なら、そろそろ軽く捻るか」

そうばやくと、二挺の銃の銃身を真横にして、完全に正面がガラ空きになり、まさに無防備な状態。だが、

「……………ッ!?」

それになにを感じたのか、心がないはずのハートレスたいの動きが止まった。

それはまさに有り得ない事態。ハートレスに感情も、まして心など皆無だ。だが、それにしてもこの状況はあまりにも異常過ぎる。

止まるはずのない軍勢が止まる、これを眺めるように視ていた和哉は感慨なく、

「畏怖を抱く……………か。まあどうでもいい……………失せる」

そう呟いた刹那、和哉の双眸が再び黄金の色をさらに増して唱え始めた。

「我は輝きに焼かれる者。届かぬ星を追い続ける者。」

届かぬゆえに其は尊く、尊いがゆえに離れたくない」

それは平行世界にいる、現在の黄金の獣と臣下にして紅蓮のカスパール、赤騎士である女傑が刹に願っていた渴望。

「追おう、追い続けよう何処までも。我は御身の胸で焼かれない

逃げ場なき焰の世界」

永劫追い続けていたい、永劫黄金の光に焼かれ続けていたというその忠節の塊にしてもっとも一途であった女の思い。その銘は……

「この荘厳なる者を燃やし尽くす Muspellizheimr

Lavateinn（焦熱世界・激痛の剣）」

灼熱の劫火で焼き尽くす焰に他ならない。

詠唱と共に銃口が輝きを増し、再び二挺の銃口を真正面に向けた

瞬間、放たれてはならない紅蓮の焰の魔槍が放たれた。

それを前に抗うことも出来ずに、ハートレスたちはただ空しく断末魔も、怨念も残さずに無限に跋扈していた闇が焼き払い消え去っていたのだ。

静かに役目を終えた二挺拳銃を懐に仕舞い、闊歩し始め、歩いていくとまだ生きていたのか、隠れていた一体のハートレスが足もとから鋭い刃を下から放ってきた。それを睥睨して、

「下らん」

一蹴した。

その場で震脚し、足もとに隠れていたハートレスを揺さぶって宙に引つ張りだすと同時にハートレスの頭を鷲掴みにし、

「……肅」

静かに掴んだ状態のまま呟くと、鷲掴みにしちたハートレスの肉体が徐々に内側に引き寄せられるように捻れていき、圧縮されていくようにして小さくなり、そして霧散した。

これほどの所業をして尚、和哉の表情に疲労の二文字はなかった。当たり前だ、現人神は人の身でありながら神格された超越神だ。この程度のこと、神々の黄昏に比べれば比較にすらならないことだ。

「さて……掃除は完了した。無限に存在するハートレスは不滅。故に、また出てくるのは承知している。まあ次に出てきたら、本当に滅しに行くがな」

最後にそう言つと、何もなくなつた次元の通路を再び闊歩して行った。

第三話「無限の影」(後書き)

次回は近日投稿する予定です
ではまた

第四話「荒唐無稽な演目 Grand Guignol」(前書き)

どうも、少し遅れました。

新しく投稿します。

どうぞ、ご観覧あれ

第四話「荒唐無稽な演目 Grand Guignol」

そも、古今東西神々の鬪争、そして戦とはなんだろうか？

各神話で名を轟かせる神代の神々は、どれも彼もが一癖も双癖もあり、絶えず争いが勃発していた。そして、それらには小さなものから大きなものまで絡んでおり、大小あれど女が関わっているのは必定。

これは神話のみならず、どの事柄に関しても女が絡んで良いことなど一遍もない。幾星霜度の歴史を見返そうとも、決して善にはならず、総てが崩壊するか、それとも自滅するかのも二者択一。女神は男神の良き伴侶であると同時に、亀裂を生じさせる自滅因果とも取れる存在。

そして、神々の中でも、各神話の中でも一際目立つ存在といえ、北欧の神話に名を轟かせる最大のトリックスターであるロキだろう。あれの気性は転々と変じやすく、また演目を奏でる一類の道化とも取れるモノだろう。

欺き、騙し、不意打ちなどは邪悪な気性から来るものでなければ、まさしく邪神であろう。

と、ここまでの前置きは置いておくとして、さてさて

「大聖杯、聖杯戦争、ラインの黄金、冬木、死徒二十七祖、サーヴアント、宝具、衛宮、遠坂、間桐、守護者、魔眼……やはり総じて、この世界は凄まじいな。他の世界を圧倒するこの存在感、侮れないのは変わらんか」

そう嘯くのは次元を闊歩し、先のハートレスに神罰を下した現人神の黒井和哉本人。他の世界を睥睨しても尚、和哉の視線を留めさせるのは、この巨大にして巨大な黒と紫と言うドス黒い色で染められ、邪悪な鎖で束縛されている球体状の世界に他ならない。

幾多もの外史を誕生させ、それでも尚留めることを知らぬ特殊な世界はどの既存の世界よりも遥かに堅固であり、その内にいる存在

達はどれも彼もが強い個我を保持している畸形の世界。

故に称するなら

「かつて存在した“月のアルティミット・ワン”朱い月のブリュンスタッドの銘から名付けて”TYPE - MOON”、といった所かしかし、どうも畸形中の畸形だな。代表……いや、象徴的ともいえるか。この世の矛盾と混沌が絢交ぜになった澱みし世界。境界、運命、月の姫……大きく分けて計三種の世界が存在するが互いに逢い見えない螺旋世界。出くわせば、互いが互いを喰らい合う自滅因子を自然と併せ持つ地球^{フライング}。

ここまで強大な力の保持者たちが出くわさず、尚且つ世界もそれを保つほどとは……水銀からしてみれば、いい玩具が見つかった。黄金からしてみれば、素晴らしいと言わしめるだろうな」

死徒二十七祖が世界の触覚。月姫も地球から生み出されし触覚。そして、朱い月が自身の器となる「真祖」の最高候補の器。それだけでも十分に世界が圧迫しかねない世界に、聖杯によって呼び出されるのは英霊の資格を持つ英雄たち。破格の魂に純度を持ち、その霊格もまた必然的に高濃度である。

終いには、魔眼の中でも特異中の特異。万物に存在する“死”を殺すことができる直死の魔眼。それを行使しても尚異常を来さない両儀。

この特殊な世界を故に、現人神である和哉は高く評しているのだ。「……と、御膳立ては十分か。既に俺の手元には十分なモノを手にしている。ならば、後は聖杯から抜き出すだけだな」

自らの手元にある“ある武器”を一瞥してから、再びこの既存の世界へ視線を落としてこう言った。

「さあ、踊れよ主演たち。主賓をあまり退屈させるなよ。俺も既存に沿うのは序章だけだ、余りにも目に余るのなら……この手で滅殺してやる」

人としての黒井和哉と神としての黒井和哉は、そうまるで彼の水銀のように宣告すると同時にその世界へ降りて行った。

第四話「荒唐無稽な演目 Grand Guignol」(後書き)

次回、近日中に新しく投稿する予定です
では、どうぞご期待あれ

第五話「incomposite」(前書き)

どうも、マキナです

投稿遅くなりましたが、新たに更新します

では、どうぞ

第五話「i n c o m p o s i t e」

……風が吹く。

涼しい微風が真夜中、音もなく心地よく吹く中、真夜中の天に魔法陣を足場にする存在がいた。

黒井和哉。

黒衣に首元からストラを垂れ下げ、優雅に微風を受けても尚、涼しげにその端正の整った顔立ちで新たに降り立った一、二位を争うほどの強大な世界であるTYPE - MOONの内の一つの街、冬木市の上空で見下ろしていた。

『……………』

涼しい夜風が上空であらうと吹く中、瞼を閉じ瞑想している和哉はこの世の怨嗟の声に思念などを感じ取っていた。

この世界は強く、禍々しく、それでいてそれに抗う人の姿が象られている。それ故に、喜劇であり悲劇の演目の場所としては上等なのだ。加え、このような世界で、特に冬木市は曰く付きの霊地でもあるのだ。

なぜ霊格が強く、そして霊地とされているのか？その総てがこの街で起きている最大の戦争、聖杯戦争にある。

万物の奇跡を詰め込んだ聖なる杯を賭け、己れの覇を競い鬨ぎ合う魔術師同士の狂気に染まりし闘争と言う名の地獄の再演。

やがてそう銘打たれることになる聖なる大儀式は、原初の時ともって、純粋な願いのみを受けて成就するはずであった。

だがしかし、今より約二百年前、ユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンと遠坂永人、マキリ・ゾオルケンによる創始されし大聖杯の儀式。

当時は魔術協会と教会は殺し合いをしていたため、召喚の地には教会の眼が届かない極東の地が選ばれ、アインツベルンが聖杯の器を用意し、遠坂がサーヴァントを降霊し、マキリがサーヴァントを

律する令呪を作り上げた。

しかし、儀式は結局失敗に終わり、悲願は果たされることなく今も子孫に伝えられ続ける。

現在においても未だに根源に至ろうとしているのは既に遠坂のみ。アインツベルンもマキリも聖杯の完成、つまり第三魔法の再現のみを望んでおり、再現した後に自分達がどこを目指すのかすら忘却の彼方にある。

それは夢想し、願い、渴望し、切望し、その根源に至るための渴望が喰い貪り摩擦して擦り切れた怨念のようなもの。

求めるのは聖杯の完成。だが、それが敵うことは一生ないだろう。なぜなら、既に聖杯は狂っている。それも、第三回目を境に、純粹にして誰しもが求める在りし聖杯は既に汚染され狂いに狂い、泥で埋め尽くされた穢れた臓腑でしかないのだ。

それを求め、救済を求めるのは愚者であり、愚の骨頂というもの。そも英雄譚を気取りたいということのなら、それこそ後世に名を轟かせるだけに留めればいいだけのこと。戦を求めるだけの英雄ならまだしも、己が歴史を改竄する？

「……ふ、馬鹿馬鹿しい。それで一体どうなるという？ 仮に聖杯を入手できようと、いや……入れたとしても歴史の改竄は抑止力に直結する行いそのものだ」

後世、すなわち現代に残りし記録の数々はどれも彼もが歴史に連なるものばかり。例え邪悪で邪よこしまで満ち足りていようとそれもそれは物語として完結している。

それを、偉大なる歴史を改竄？ なかったことに、やり直したと？ それをこの現人神が許すとても？

「いいだろう……そこまで救済が欲しいのなら、この俺が救済してやるよ。孤高でいたいんだろ、騎士王殿？ なら、お前の願望は俺が殺してやるが……まあ世界は俺が救おう。この世界が消え去ることなど、俺が許さない」

そう宣誓するように、強き堅固なる意思を明確に示してから、魔

法陣の上から見下ろしていた和哉は徐にとある方角へ鋭い視線を放ち、

「聖杯……」

ドクンッ！

強く、今までは根本的に異なる明確な殺意を乗せた睨みつきで見据えていた。神気を発する和哉の総身は、彼の黄金の獣の如く輝きを増し、水銀の如く人外なる気配を発していた。

「お前に取り込まれた霊格……悪いが、俺の元へ返上させて貰おうか」

黄金の瞳に変わった和哉が徐に右手をその“方角”へ向け、掌を見せるようにしてから

「掌握、並びに奪還開始　！」

一気に握りつぶした瞬間、鳴動した。

魂の叫び。悲痛な雄叫びが瞬く間にこの冬木市全体に木霊していき、それは異常事態ともいえる状況でもある。大霊格にして至高とされ、今でも邪性を有しながらも聖杯の名を冠している大聖杯に対して、物理的ではなく間接的にはあるが干渉し、剩えその聖杯に取り込まれたかつての英霊の魂を、霊格を抜き取るうとしているのだ。

通常、いや……これは魔法使いにも真祖にも言えることだが、一貫してこれは有り得ない。出鱈目もここまで通ればご都合と称しても過言ではないだろう。聖杯に取り込まれた霊格は聖杯戦争に応じてそのマスターの波動による同調に所有者の持ち物などで呼び出しを決定するモノであり、それは総て聖杯があつてこそそのことである。その大本である聖杯から強靱な英霊の霊格と魂を奪おうとするこの所業は、業が深い……と言えるはずもない。

清らかで純粋な聖杯なら彼もこのような暴挙には出なかつたはずだ。だが、今回のこの聖杯は彼が知りうる中でも邪悪にしてあつてはならない代物だ。生み出してはならない、呼び出してはならないアヴェンジャーを呼び出し、聖杯の中身が完全に善とは真逆の相對

相克物。故に、彼の英雄たちを聖杯の軛から解き放つのだ。

征服王も取り除くべきなのだが、最優先はかつて魔術師殺しの計略により自害させられ、または騎士王との戦いの末に王の腕かひなの中で成就されたものの、その魂魄は聖杯に取り込まれたまま。

ならばこそ、この二柱の英雄を救い上げることが重要と言うもの。しかしなれど、聖杯からの抑制力は凄まじい。紫電を撒き散らしながらもアンリマユの“あの”泥が纏わり付こうとするが、和哉の発する神気と神威によって蹴散らしている。並のサーヴァントなら発狂しかねないこの汚泥を流石の和哉も警戒はする。

「邪魔をするか、アヴェンジャー……お前のその薄汚い願望なんかでこの俺を束縛しよう？ 願いを成就させよう？ 巫山戯るなよ屑が。塵芥風情が現人神に対して阻むだと？ その驕慢、その傲慢、あの在り方。看破した上で消し飛ばしてやる」

そうだ。黒井和哉の本懐は世界の崩壊を防ぐこと。それを成し遂げるために、今この場にいるんだ。彼が模倣神として謳われるのも、そうして自負して尚彼の起源は止まることがないのも、彼がそれを宿願として臨むからである。

望みし力は栄光なり。模倣こそ総ての起源。総ての根源。誰しもが願い、思い、希う希有の渴望。模し、模索し、そして己の太極として組み込む。

和哉の渴望は強く堅牢なもの。それをたかだか聖杯如きに邪魔立てされる道理はない。

さらに握る右手に圧力をかけて紡ぐ。

「告げる。

汝の身は我が元に、汝の身は我が権利なり。

聖杯に束縛されし哀れな靈魂よ。その身、この世の理を唾棄したいのなら希え。

誓いとここに、制約を掲げよ。戒めを解き放ち、戦を駆け抜ける英雄たちよ。

今宵を持って共に戦場を駆けける一筋の閃光となれ。汝らの宿願、

我が身で果たさせてやろう。

顕現せよ、我が身、我が総身を喰らいて力となせ　！」

強く、強く、より強く。聖杯から来る抑止の力を退けながら、さらに紡ぐ。

「汝の身を我が下に。君臨せしめよ。ここに、我が銘を汝らに託そう。

理を唾棄せよ。ここに、顕現するは現人神、黒井和哉なり。汝ら、希うはなんだ!？」

朱く、紅く、赤く紡ぐ。紫電を撒き散らしながらも和哉の詠唱に言霊はより強く刻まれていく。大聖杯の力は強く、この地は霊地としても上級のもの。それを容易に払拭できるものは、もはや人知の埒外。神の所業以外の何物でもない。

拮抗し、抗い続けるアヴェンジャー。

許さぬ、離さぬ、屈せぬ。

強き怨念、我執、執着……より簡潔にいうなら、そう表現してしまえば簡単だ。もともと、アヴェンジャーが希うは純粹なる「人の願いを叶えること」。だが、それは第三次聖杯戦争によって滅茶苦茶にされたも当然。

いまや、アヴェンジャーは狂いに狂った淀んだ聖杯でしかないのだ。かつて、今や亡き衛宮切嗣が聖杯が叶えさせようとした唯一の人物であり、彼は世界に絶望した上で行動していたのだ。そして、それ故に聖杯　すなわち、アイリスフィール・フォン・アインツベルンはそれを受諾しようとしたのだ。

だが、聖杯の何たるかを理解した切嗣はそれを拒絶した。それは見事なまでに天晴れだった。

歪みし絶望の塊、聖杯。それに繋がれ、円環するしかない無垢なる魂。靈魂。

その定めをこの黒井和哉がそのスレイプニルを、轍を解放させてやるのだ。

強力な魔力で抗っていた聖杯であったが、ついにその拮抗が崩れ

始め、そして……

「緩めたな、アンリマユ。これで最後だ」

僅かな笑みを見せた和哉は、この僅かな奇跡を見逃す道理はない。ここで解き放つのなら、この詠唱を置いてほかにはないだろう。

「Es schaemt das Meer in breiten Fluessen《海は幅広く 無限に広がって流れ出すもの》

Am tiefen Grund der Felsen auf, 《水底の輝きこそが永久不変》」

そうだ。放つとは先を駆け抜ける閃光であること。それが意味するのなら、超越を謳うだけのこと。

「Und Fels und Meer wird fortgerissen In ewig schnellern Sphärenlauf. 《永劫たる星の速さと共に 今こそ疾走して駆け抜けよう》」

「Doch deine Boten, 《どうか聞き届けてほしい Herr, verehren Das sanfte Wandelndeines Tags. 《世界は穏やかに安らげる日々を願っている》」

ツアラトウストラが刹に願い、その魂が基となったロートス・ライヒハートが渴望したのは「刹那」。

一瞬の麗美を称えたい。美しいから、輝かしいからまた循環して駆け抜けた上で戻りたい。美しいまま残しておきたいのだ。

「Auf freiem Grund mit freiem Volk stehen. 《自由な民と自由な世界で》
Zum Augenblicke duerft ich sagen 《どうかこの瞬間に言わせてほしい》」

汝はかくも美しい。そうだとも、例え単一思考でしかならうと、

その思いは美しいとも。それは水銀も黄金も黄昏も言えることだ。

最上は黄昏。総てを慈しみ包み込む慈愛は甘美なるもの。思わず和哉でさえ讚えてしまふほどだ。至高と謳ってしまふほどに純粹で綺麗なのだ。

異なるうとも天を貫くのは黄金と水銀。この二柱ははずば抜けて他者の渴望を凌駕するものであり、それ故に和哉も唾棄しない。

これらの渴望は、どんなものであれ和哉は良しと、そう想っているのだ。

「Verweile doch du bist so schön?」
「時よ止まれ 君は誰よりも美しいから」

だからこそ、ツアラトウストラよ。お前の渴望を使わせて貰うぞ。

「Das Ewig-Weibliche zieht uns hinan.」
《永遠の君に願う 俺を高みへと導いてくれ》

願うは停滞。そう、すなわち

「Atziluth」
《流出》
指し示すは

「Res novae」
《新世界へ》

「Also sprach Zarathustra」
《語れ超越の物語》

時の永劫不変なる停滞に他ならない。

刹那、今まで抗いそれこそ刹那という間に時の停滞により聖杯はその魔力による抵抗が凍結し、そしてそれを期に和哉はもう一度強く告げる。朗々とはなく、宣誓するかの如く。

「さあ出でませ、我が呼び込む至高の騎士。汝らの軛を今ここで解き放つ。」

来い、デイルムツド・オディナ！サー・ランスロット！

そしてついに、聖杯から魂魄と記憶と記録と共に、かつて第四次聖杯戦争に参加していた英霊が再び解き放たれたのだ。

第五話「incomposite」(後書き)

次回、第六話を投稿します
ご期待ください

第六話「旧英霊、再び」(前書き)

どうも、マキナです

第六話を投稿します

今色々模索していますので、どうか長い目で見守りください。

第六話「旧英霊、再び」

今この魔法陣の上で立っている和哉の目の前で傳く二人の男。

そう。先ほど聖杯から見事奪取することに成功し、自身を糧に顕現させた二柱に他ならない。

一人は癖のある長い髪をざっくり後ろで撫でつけた、端正な男だった。まず真つ先に目を惹くのは、その獲物。身の丈をさらに上回る二メートル余りの長竿は、もはや武具として見間違えようもない。七つのクラスの中でも“騎士”の座として恐れられる三つ　セイバー、アーチャーに並び立つ“槍”の英霊。

異様なのは、その象徴的でもある長柄の獲物が一本限りでなかったことだ。

ランサーは右手に緩く握った長槍の穂を肩に預けているのとは別に、左手にもう一本、右のそれより三割ほど短い拵えの短槍を携えていた。

槍の長さを活用して自在に操るとなれば、当然、両手を使って一本を構えるのが当然である。刀剣ならいざ知らず、二本の槍を同時に使うという流儀は尋常には想像しがたい。

そう。この男こそ、かつて第四次聖杯戦争時、ケイネス・アーチボルトに仕え、無念にも切嗣の計略によって死した騎士の誉れ高き英霊。

デイルムツド・オディナ。ケルト神話に名を残す英雄だ。その美貌に女性を恋に落とす魔貌を有するのもまた有名だ。

肩や、かつて騎士王と敵対し、狂気と憎悪を纏いながら狂った狂戦士として戦ったサー・ペンドラゴンことセイバーと主従関係であった最強の騎士、サー・ランスロットその人物である。

彼は最終的にはセイバーに突き刺され、その手で葬られたことで眠りについたが、死しても尚聖杯の轍がある限り、永劫解き放たれることが叶わない宿命にあったのだ。

ならば、彼らを解放させるためには、己が肉体を総身を糧にさせることで顕現させ、聖杯のバックアップ抜きで、今度こそ全力全開で競わせる機会を与えてやることこそが、現人神の所業とも言えるだろう。

「お目覚めは如何かな、デイルムツド。そしてランスロット」

「……なんとはいいかわからぬが、感謝する。再び、またこの地で戦える機会を与えたこと、感涙の至り」

「それは重々。んで、ランスロット？お前はどうか？呪縛から解放したんだ、後はお前の意向で動くことを俺が許可する。どうだ？」

「感謝……の一言でしょうね。我が王との因縁は終わりました。ならば、後は戦う機会、そして救って下さったことへの感謝を示したい」

双方ともに和哉へ感謝の意向を示していた。双方先の戦争に遺恨がないといえは嘘になる。かたや計略で騎士王との決着に水を差され、かたや騎士王の腕に抱かれながら死したものの、それでも聖杯の呪いが付着している。

それらを解消するための機会を、全力を発揮できる機会をこの目の前の黒井和哉は与えたのだ。如何に自由とはいえ、和哉を糧に顕現し、まして聖杯のバックアップ抜きにしてもこの総身に巡る膨大な魔力量。

主従関係、ましてともに戦う戦友として戦うことこそがこの二人の天命ともいえるだろう。

そんな二人の心境を察しても尚、和哉は一つ頷き、

「相も変わらずの石頭が……まあいい。主従関係ではなく、友として駆け抜けてくれ」

両者の肩に手を置いて優しく友に語りかけるように言葉をかけてから、両者の間をスツと抜けて真正面を向いた。

「では、これより始まる聖戦に赴こうか。こちらも少々思惑があるのでな。戦略を実行する。デイルムツド、ランスロット。これより本来いないはずの二重たるセイバー、ランサーの座”クラス”とし

て活躍してもらおう。期待してるぞ？」

『はっ！』

これを機に、とうとう第五の聖なる杯を求めて魔術師同士の闘争が、戦が、聖戦が、殺し合いが、戦争の幕が切って下ろされたのだ。

第六話「旧英霊、再び」(後書き)

次回、第七話を投稿します。
ではまた。

第七話「肅清」(前書き)

どうも、マキナです

第七話を投稿します

では、どうぞ

第七話「肅清」

「さて……今宵を以つて聖杯戦争の鐘が鳴った。今しがた、七番目のサーヴァントの受諾を知覚した。この霊格、デイルムツド並びにランスロット。お前達二人なら分かるだろ？ 一体、どこのどいつなのかはな」

意味ありげな視線で傳く二人の英霊を睥睨する和哉。ほぼ寸分の狂いなくこのイレギュラーである二柱を喚起したと同時に、聖杯から排出された新たな霊格が降りた。この真正直で小細工などが嫌い、それでいてこの白銀の靈魂は間違いなく

「……ああ。間違いなく、この霊格はセイバーだ」

「……王よ」

傳きながらもデイルムツドとランスロットの表情は俯きながらも双方異なっていた。

片や、衛宮切嗣という魔術師殺しの計略による横槍が入り、また片や成就されたが再び逢い見えるであろう騎士王に思いを馳せている。

騎士道に忠実。それが二者の共通点であり、前回の参加サーヴァントでセイバーとの戦闘も体験しているというのが特徴であり、それ故に今回のこの聖杯戦争において彼の騎士王の上を行っているのは必然ともいえる。

しかも、相手は衛宮切嗣の養子でありながら異端にして異常、希少にして万億分の一の確率で出現する畸形。衛宮士郎ときたものだ。魔術回路は強靱で有り得ないのだが、なんせ魔術師としては三流。腕も三流。経験も知識もない。魔力量も契約による回路も欠損している始末。よくもその身に彼の妖精郷の鞘が埋め込まれているとはいえ、ある意味では哀れともいえるが、この主従関係もまた異様なもの。

ともあれ、

「ま、思うところはあるだろうが、まずは先に動くぞ。言峰綺礼に英雄王がいるんだ。この二人をまずは蹴散らしたい……と、言いたいところだが、まずは先に間桐臓硯を始末するぞ。キャスターの目も気になる、それ故にここから射殺すでしょう」

「なに？」

「……ここからか？」

突拍子もなくそう軽く気概なく言い、身を翻し逆の方角に位置するとある「家」を見据え、ストラを靡かせ白き手袋を嵌め直した和哉にランサーとセイバーは訝しんだ。

当然だろう。この魔法陣の位置する場所は地上より離れた遙か上空。地上を見渡せるのは、和哉の魔力提供により視覚補正と本来持ちえる視力によるものであり、それ故にこんな天高い上空から一体何ができるといふ？

確かに魔術師の中には、占星術と呼ばれるものや時間と星の動きに連動して、座標を合わせることで強力無比の「魔法」を発現することは可能だが、如何にそうはいつてもこんな場所からではさうとう威力も高く、広範囲な魔術的攻撃になってしまう。だが、

「心配するな。俺が殺すのは間桐臓硯のみだ。慎二に桜は放置だ、まあ桜からは聖杯の欠片を取り除けばよいだけのこと。造作もないことだ」

至難の業である聖杯の欠片を切除することを造作もないと平然と言つて退ける黒井和哉に、この二人の英霊は少なからず何かしらを感じていた。魔力提供に加え、聖杯から救出した男が神と称し、またそれが事実であることは理解してはいても、こうも平然と言う男の冷静な心境は並外れ事だ。

二人のそんな心境に異にも介さず、和哉はその方角に右手人差し指をさらに上の天に向け、朗々と詠唱を唱え始めた。

「罪の鎖より解放し、盲人に光を与え、我らの悪を去らせ、すべて良きものを与えたまえ

汝、御母なることを示したまえ、汝を通じ、救いのため生まれし

イエズスが祈りを聞き給うよう

靈妙にして、何にもまして柔和なる乙女よ、罪の赦しにあつて、
我らをも柔和で清らかとなし給え」

アヴェ・マリス・ステラ。めでたし、海の星という意味を持つ聖
マリアを称えるイムヌスであり、この場合罪の鎖とはマキリ・ゾオ
ルケンの積み重ねた所業に対してであり、盲人とはゾオルケン本人
を指し示している。

よつて、本来の渴望と願望を忘却した憐れな間桐臓硯に対して、
このまま消し去つてやろうというのが和哉の今の心境なのだ。

「Briah 《創造》」

そう。あの蠱虫を排除するのなら、灰燼にさせるだけだ。それも、
灼熱の、炎熱の業火を以つて。

抜刀が起きる。何が何でも抜かせてはいけなかつた^{スルト}焰の剣が、今
ここに鞘走る。

ここに、再びかの赤騎士の渴望とそこから創造された創造位階。
絶対に逃げられず、絶対に命中し、総てを焼き尽くす炎が凝縮し
た世界。

黄金の獣に永劫焼かれ続けることを渴望した炎熱世界。ムスペル
の名を冠する世界。

その銘は

「焦熱世界・激痛の剣（Muspelzheimr L?vat
einn）

敵となる不純物^モを撃滅する剣なり。

最後の詠唱が完了すると同時に、振り上げていた人差し指を振り
下ろした。

刹那、大凡有り得ない熱量と焰が圧縮されて形を成した焰の、煉
獄の槍が「とある」家にいる方角に向けて放たれたのだ。

灼熱の業火の朱槍が解き放たれ、その家に着弾した瞬間、天壤の
業火が一軒家を天まで続く階を造り上げていた。

怨嗟も、怨念すら残さない無慈悲なる炎熱。そうだ、彼女の業火

は至高の黄金の破壊も冠している。故に、彼女の愛は至高の黄金そのものであり、殺すことでそれを証明するものでもあるのだ。

その家にいたであろう間桐臓硯は逃げる間もなく、ただ虚しくこの世から灰燼と成り灰となったのだ。

これが、原初の、初期の聖杯戦争の制作に携わったマキリ・ゾオルケンの、ある意味で正義の味方の成れの果てとなった男の哀れな末路であった。

そして、これが贖す意味は二つあった。それは

「これで、間桐桜の蠱虫は死滅したはずだ。そして、霊格を有していた間桐家が消え去ることで全員に知れ渡るだろう。ふふ、さてさて……開戦の号砲は鳴らしたぞ？凱旋に相応しい戦いの鐘を今景気ファンファーレよく警鐘したんだぞ？」

動けよ道化ども。俺が演目を彩らせてやるから、せめて足掻け」
彼の水銀のように、黄金の獣のように天を見下しながら黒井和哉はこの聖杯戦争に参加するという意思表示を示したのだ。この主人に追従するランサーとセイバーは、ただ静かにそれを後ろから見守っているのであった。

第七話「肅清」(後書き)

次回、設定2
近日投稿します
ではまた

設定2 (前書き)

どうも、マキナです
では、さよう

設定2

ここでは、各世界の能力並びに用語などを知っている方には申し訳ありませんが、敢えて搭載させて貰います。

・ Dies irae - Acta est Fabula -
聖遺物 (AhnenErbe)

過去の聖人の遺品のことではなく、人間の思念を吸収することにより自らの意思を持ち、絶大な力を持つようになったアイテムの総称。

聖遺物を扱うためには、メルクリウスの組み上げた複合魔術永劫破壊 (Ewigkeit) と呼ばれる理論が必要。

これは発動に人間の魂を必要とし、使うには常に人間を殺し続けねばならない。殺せば殺すほど強くなっていき、殺した数に相当する霊的装甲を常に纏うようになる。しかし魂にも質が存在し、単純な量だけで決まるものではない。戦士や同胞の魂ほど質が高く、質と量の両面を兼ね備えるほど効率的に強化される。

エイヴィヒカイトを操る者は聖遺物によってしか倒すことが出来ず、それ以外の手段での攻撃は一切通じない。聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ防ぐことは出来ない。また仮に肉体的損傷を受けても、喰らった魂 (人数) に相当する生命力を得るため、自己再生される。

聖遺物を破壊されない限り、エイヴィヒカイトの使い手は不老不死であるが、逆に聖遺物が破壊された使い手は死亡する。しかし、これらの特性はエイヴィヒカイトの副次的作用に過ぎず、本来のエイヴィヒカイトがどのようなもので、何を目的として作られたのかは、生みの親であるメルクリウス以外誰も知らない。

経験を重ねることにより位階 (Degree) は変化し、戦闘能力も飛躍的に増大する。

位階が一つ違えば、その戦闘力は桁違いになる。

聖槍十三騎士団に属する者たちは、ほぼ全員が第三段階である「創造」の位階にまで達しているが、内二名は形成位階止まりでいる。

活動 (Assiah)

初期段階。

限定的に聖遺物の特性を使用できる。

形成 (Yetzirah)

聖遺物を具現化できる。

聖遺物の使い手の基本形態。

五感・霊感が超人化し、破壊と戦闘を高次元で行えるようになる。高密度の魂を取り込んだ場合、それを具現化させることも出来る。

創造 (Briah)

切り札、必殺技を獲得する段階。

使い手の魂に刻まれた渴望をルールにした、己と己の聖遺物にとつてのみ都合のいい異界を創り出す。

霸道型

術者の周囲の空間を異界に変異させる。

他者を食い潰して広げる道であり、主に「〜であったらいいのに」という思いが元にある。

一対多の戦闘に向いている。

求道型

術者自身を異界として肉体変化や特殊能力を付加され、己を異界とする。

自分一人で突き詰めていく道であり、主に「〜になりたい」という思いが元にある。

一対一の戦闘に向いている。
自己完結しているため効果が強く破られにくい。また他者を取り込まないため、他者に影響されずにその効果を発揮できる。

流出 (A t z i l u t h)

エイヴィヒカイトの最上位階。創造の異界とそのルールを永続的かつ全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。

ただし求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となるだけで、他に一切影響を及ぼさないため、真の意味での流出には達せない。

また聖遺物は四種の武装形態 (K a m p f f o r m) に分類される。

人器融合型

肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を発揮する。

性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などがなりやすい。

武装具現型

聖遺物を刀剣などの武器として扱う。

突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は発揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはっきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。

事象展開型

魔術や呪術のような働きをする。

物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。

特殊発現型

上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。
他を上回る強大な力を発揮することもあれば、状況次第では全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。

エイヴィヒカイト (E w g k e i t t)

聖遺物を武装化し、超常の力を行使する理論体系。永劫破壊。
聖槍十三騎士団副首領、メルクリウスが編み上げた複合魔術。

駆式に人間の魂を必要とし、エイヴィヒカイトを操るには常に殺人を続けなければならない。殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏うようになり、殺せば殺すほど強くなっていく。また、原則としてエイヴィヒカイトを操る者には銃火器やナイフ、打撃などといった“常識的攻撃手段”は通じず、ダメージを与えることは出来ない。

その他の特性として、聖遺物とその使徒は、聖遺物によってしか倒すことが出来ない、聖遺物が破壊されればその使徒も砕け散る、聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ止められない、聖遺物が破壊されない限り、その使徒は不老不死、などがある。

しかしこれらの能力もエイヴィヒカイトの副次的作用に過ぎず、本来のエイヴィヒカイトがどのようなものなのか、何を目的とし、何処に至るためのものなのかは、生みの親である副首領以外、誰も知らない。

・TYPE - MOON

根源

世界の外側にあるとされる領域で、「あらゆる事象の発端」「万物の始まりにして終焉」。すべての魔術師にとっての最終到達目標である。

起源

あらゆる存在が持つ、原初の始まりの際に与えられた方向付け、または絶対命令。あらかじめ定められた物事の本質。

抑止力

現在の世界の存続を図る、カタチのない力。

集合的無意識（本作での使われ方は超個体に近いもの）が生んだ安全装置。

真祖

吸血鬼の一種で吸血種の中でも特異なモノ。

人間を恐れた星が生み出した、人間を律する「自然との調停者」。星をかつての姿「真世界」に戻そうとする「自然（星）の触覚」。

精神と肉体の構造は律する対象である人に似せて作られているが、分類は受肉した自然霊にあたり、生まれた時から人知を超えた力を持つ。

高い身体能力に加え、精霊に近い性質を持ち、世界と繋がることで思い描く通りに自身（精霊）と自然を変貌させる「空想具現化」（マール・ファンタズム）の異能力を有す。

直死の魔眼

「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。

これが読み取って視覚する「死」とは単なる「生命活動の終了」ではなく、あらゆる意味や存在そのものが発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”、「死期」や「存在限界」を意味し、存在の寿命そのものである。

魔術と魔法

「魔術」とは、人為的に神秘・奇蹟を再現する行為の総称。

魔力を用いて「世界にあらかじめ定められているルール」を起動・安定させ、神秘を起こす。

「魔法」とは、魔術師たちの最終到達目標。

魔眼

視界内の者に一工程の魔術を行使する眼。

行使する魔術の種類は魔眼により、暗示・魅惑・束縛・石化など多数存在する。

魔眼は色でランク分けされ、緑や赤、黄金、宝石、虹の順に格上になっていく。

固有結界

“異界創造”法的一种。自らの内面である心象世界をカタチにし、現実を侵食させて創り出す結界。

術者の心象世界の体現ゆえに個人個人でその能力の概要は大きく異なり、カタチは常に一定で術者の意思では変えられないが、影響下のあらゆるものを“現実と異なる現実”に従わせることができる。

本来は悪魔や精霊の能力だが、死徒や魔術師も一部の上級者が可能とする。

宝具

ノウブル・ファンタズム。貴い幻想。

サーヴァントの持つ武装であり、象徴であり、奥の手。

それだけで優れた武器でもあるのだが、その本領は「真名」を呪文として唱える事によって発揮される。

物質化した奇跡であるそれが開放する真の力は、魔術師の魔術のレベルを凌駕している。

聖杯

神の血を受けた杯。

手に入れた者のあらゆる願いを叶えるという願望機であり、最高位の聖遺物。

聖杯戦争

およそ二百年前から冬木市で繰り返されている大儀式。

あらゆる願いを叶えるという聖杯を手に入れる為に、聖杯に選ばれた七組のマスターとサーヴァントがその技を競い合い、他の六組を排除しなければならぬ殺し合い。

クラス

役割。クラス。

いかに聖杯といえど精霊に近い存在を無制限に呼び出す事はできない。

故にサーヴァントが形になりやすくし、仮初めの物質化を可能とする為に予め用意した役割で、「セイバー」「ランサー」「アーチャー」「ライダー」「キャスター」「アサシン」「バーサーカー」の七つが存在する。

また、各クラスはそのサーヴァント個人が習得している技能とは別にそれぞれ固有能力を有する。

第二魔法

並行世界の運営。

ゼルレッチはこれによって「個」を維持したままでの並行世界への移動を可能とする。

第三魔法

魂の物質化。魂自体を生き物にして生命体として次のステップに向かわせるという物。

精神体でありながら単体で物質界への干渉を可能とする高次元の

存在を作り出す業。

「天の杯」^{ヘンズフィール}と称され、アインツベルンから失われたとされる神秘であり、真の不老不死を実現させる大儀礼。

第三要素

「精神」の事。霊体である存在にとってのエネルギー源になる。

英霊

サーヴァント。

聖杯戦争において七人のマスターに従う、それぞれ異なつた役割^{クラス}の使い魔。

使い魔としては最高ランクで魔術よりも上にある存在。一般に使い魔という単語から連想される存在とは別格。

その正体は英霊という、生前は英雄であつた者たち。剣術・魔術に長け、人の身でありながら精霊の域にまで達した存在。「宝具」という必殺の武器を持つ。

概念武装

決められた事柄を実行するという固定化された魔術品。

物理的な衝撃ではなく概念、つまり魂魄の重みによって対象に打撃を与えるという物。

・ DUEL SAVIOR

根の世界アヴァター

もっとも根源的な元素となるものを生み出し伝える事を役割とした世界。

救世主候補

破滅の軍団からアヴァターを守るために別世界から召喚される人間。

実力が認められればアヴァター出身者でも救世主候補になることもある。

召喚器

救世主たちが使用する武器。

救世主候補となった人間はその手の中から現れ、一般人が使う武器よりも強力な力を手に入れることが出来る。

武器は剣や弓など救世主となった人間の特性に合わせた武器となり、能力も様々。召喚器には人格が存在し、ほとんどの人格は女性だが、トレイターのみ男性になる。

赤の書

救世主候補はそれぞれ素質がある人間をこの世界に呼び出すためにこの世界へと召喚するために必要なもの。

召喚される人物はアヴァターの事情を説明した上で救世主候補になることを納得してもらい召喚されることになっている。

・アスラクライン

アスラ・マキーナ
機巧魔神

模造品の悪魔。

クロガネ
? 鐵

漆黒の魔神。

ヒスイ
翡翠

透きとおった淡緑色の魔神。
アイスグリーン

シロガネ
白銀

銀色の魔神。

ローズナイト
薔薇輝

薔薇色の魔神。

スインショウ
翠晶

みどり

翠色の魔神。

ヒスマス
蒼鉛

暗蒼色の魔神。

ハガネ
鋼

最終形の完成された機巧魔神。？鐵と白銀の能力を共に使え、それらを組み合わせさせて発動させる時空間転移、時間の巻き戻しが可能。

ペリアル・ドール
副葬処女

機巧魔神を動かすための「贄」として機巧魔神の中枢部に収められている少女。

ハンドラー
演操者

機巧魔神を召喚し「演操」ハンドリングすることの出来る人間。

エクス・ハンドラー
元演操者

かつて、機巧魔神の演操者だった人間。

フェミナ・エクス・マキナ
機巧化人間

サイボーグ。

悪魔

男性の雄型悪魔と女性の雌型悪魔が存在。

非在化

異世界の影響力である魔力を行使する度に、この世界が自身にとって異物である悪魔を排除しようと働くために、その反動を受けること。

その結果、体が透明な硝子のような結晶体にかわり、消滅していく。

契約者

悪魔と「契約」を結んだ人間のこと。

使い魔を従え、それに守られる。契約者の心が悪魔から離れると、悪魔の「非在化」を引き起こしてしまう。

使い魔

雌型の悪魔が契約者に与える力の具現化した象徴として、契約者に従属する獣。

悪魔の属性によって様々な特殊能力を有し、機巧魔神に匹敵する戦闘力を持つ。

魔神相剋者

機巧魔神と使い魔、本来相反し打ち滅ぼし合う筈の2つの力を手に入れた危険な存在。演操者であり契約者でもある。

演操者と契約者、どちらの立場から見ても本来の在り方とは違うイレギュラーであり、世界の仕様の裏をついた存在。

・烈火の炎

火竜

全部で8匹存在する。それぞれの火竜には異なる能力がある。炎を様々な形に変え攻撃するが、性格も異なっており扱いが簡単な者もいれば難しい者もいる。

能力の発動の際には名前の頭文字を描くことで竜を呼び出せるが、

この動作が完全なものでないと火竜は発動しない。火竜同士の力はほぼ互角。

崩

大きな目と長いひげが特徴の火竜。

球状の炎で攻撃し、数は1つから無数まで出すことができる。

碎羽

8つの目と後ろに伸びた一本角の火竜。

烈火の下腕に翼状の炎の刃を形成する。

焰群

十字に開く鳥の嘴のような口を持つ「竜之炎参式」の火竜。

炎をムチ状に形成し、近中距離での攻撃を担う。

刹那

「竜之炎肆式」の火竜。

発動と共に隠された唯一の目が開き、その目を見たものを一瞬にして燃やし尽くす「瞬炎」を持つ。

円

「竜之炎伍式」の火竜。

三つの目で火の玉を発生させ、それらを頂点とした「面」による炎の結界を作り、攻撃を跳ね返すが、頂点となる火球を破壊されると結界の面積は小さくなり、あまりに小さくなると内部の人間が危険になる。

罍

爛れたような皮膚の「竜之炎陸式罍」の火竜。「かたなし型無の罍」。

術者である烈火が頭に描いたものを炎の幻として見せることができる

きる「幻炎」を持つ。

虚空

一つ目が特徴の「竜之炎漆式」火竜。

一つの炎弾を作り出し、そこから強力なレーザー砲のような炎を放つ。

裂神

後ろに伸びた2本の角とトサカ状の頭髪を持つ「竜之炎捌式」の火竜。

死者の魂を取り込んで術者の炎とする能力を持つ。

・風の聖痕

風術

風の精霊の力を借りる術。

浄化の風

和麻が使用する蒼い風。

コントラクター（契約者）

人間には決して対抗できない力を持つ超越存在と契約を交わした者。

精霊王と契約を交わした場合、その力を譲り受けることができる。

炎雷覇

剣の神器。

・レンタルマガカ

グラムサイト
妖精眼

神代の魔法使い達が持っていたとされる伝説の魔眼で、魔物の「

全て」を見ることができ、強すぎるその能力は所持者を蝕むと伝えられている。

・史上最強の弟子ケンイチ

開展と緊湊、制空圏

「武術の段階」。

「先に開展を求め、後に緊湊に至る」という中国武術で実際に使用されている言葉から来ている。

「武術の第二段階」であるところの「緊湊」に到達した者は、自身を中心とする全方位に「制空圏」と呼ばれる球状空間を展開し、領域を侵犯した敵対物に対する識域下での迎撃行動を起こすことが可能となる。

・セキレイ

鶺鴒計画

108羽のセキレイを帝都に放ち、選ばれし葦牙と共に最後の1羽までバトルロイヤル方式で闘わせる。最後に残った葦牙は世界の命運を手に入れ、セキレイは最も好きな人と永遠に嫁がれるという。

セキレイ

鶺鴒計画の中心。葦牙を高天へ導くため世に放たれた108羽の存在。

見かけは人間と変わらず、遺伝子的にも人間に近いが共通して鶺鴒紋があり、個体別に特化した能力を持つ。

葦牙

セキレイを御する能力を持った人間。

セキレイを羽化させ、その主人になることができる。

一部の葦牙は複数のセキレイを羽化させることができたり、他の能力を身につけたりできる。

鵲鳩紋

羽化したセキレイの証。首筋に近い背中に現れる。

紋の出たセキレイは自分の能力を自在に扱えるようになり、祝詞を唱えることで能力の強化が可能となる。

鵲鳩基幹

鵲鳩の中枢となるもの。鵲鳩の魂とも呼ばれる。

祝詞

セキレイが各々に固有のものを持つ、より強大な力を発動させる時に唱える言葉（要粘膜接触）。

・戦う司書

追憶の戦器

神々が作り出したとされる兵器。7つあるとされる。

常笑いの魔刀シユラムツフェン

針状の小剣の形をした追憶の戦器。

「因果抹消攻撃」という独自の機能を持ち、斬るといふ過程と斬ったという結果を切り離すことが出来る特性を持つ。振っただけで無数の剣撃が相手に襲い掛かり、あらゆる敵を葬るといふ半自動攻撃と危害を加えてくる攻撃から身を守る攻防一体の魔剣。

虚構抹殺杯アーガックス

杯の形をした追憶の戦器。その杯に汲んだ水に消したい記憶を囁き、水を飲み干すことで記憶を消す機能を持つ。

設定2（後書き）

次回、第八話を投稿します
では、また

第八話「第五次聖杯戦争」（前書き）

どうも、大分投稿が遅れたマキナです。

本当に申し訳ありません。少々用事が立て込んでいたので、投稿するのが遅れました。

では、どうぞ！

第八話「第五次聖杯戦争」

灰燼と成れ果てた間桐家に対し、和哉は一度一瞥してから瞑想を一度してから、

「……探査終了。よし、間桐桜と間桐慎二、並びにサーヴァントのライダーは健在だな。幸い、二人は外出中であつたのは僥倖だな。まあ知っていなかったら俺も灰燼にはしないがな」

苦笑しながらも和哉の表情には満足したようであつた。身中の癌の切除が完了したのだ。間桐家に住み着く聖杯製作に携わつた怨念その執着は醜くも、しかし真の意味で正義の味方の成れの果てであるからこそ和哉の手で葬つたのだ。これはいわば、和哉なりの礼儀ともいえるだろう。

「……さて、これには全マスター並びにサーヴァントは探知しているはずだ。これに気付かなかつたら、それこそ魔術師どころか、人として終わっているだろうよ」

「しかし、良いのか我が主よ」

と、そこまで背後で黙っていたディルムツドが口を割り、和哉に言葉を吐いた。

「何がだ？」

「此度の聖杯戦争。我が主は何やら知っておられるようだが、何故存じておられるかお聞かせ願いたい」

「ほう……？」

目を細め、傳く槍兵に視線を向ける。魔貌を有するこの騎士は聡明であり、また実直であるが故に主人たる新たなこの男の真意を測ろうとしているのだ。また、それを和哉も察しがついていた。

だからこそ、黒井和哉も彼を顕現させた主人として敢えて疑問を投げかけた。

「理由を訪ねた動機は何だ、フィオーナ騎士団随一の騎士よ？」

「強いていうなら、我が主の言動並びに先の攻撃も大いに疑問が浮

上したが故であり、それ以上でも以下でもありません」

そう簡潔に言う男の姿、態勢もまた実に絵になり、女性なら虜に
されていることだろう。

魅了チャームの魔術を有しているディルムツドは、女性を虜にするほどの
容貌とその泣き黒子がある。魔貌ともいえるそれは絶大な効力を発
揮し、魔力抵抗がない女であるのなら、瞬く間に、瞬時に惚れさせ
てしまうのだ。実際、彼は第四次聖杯戦争時においてもそれは聖杯
の守り手であるアインツベルンにも眉を潜ませているのが実証させ
ていた。だが彼は、恋に墜ちて墮落するほど落ちぶれてもおらず、
彼は生粋の戦士だ。騎士道を歩むこの男に限り、情欲に溺れること
はない。

ふふふ……、彼を見ながら和哉は愉快そうに笑みを浮かべて小さ
くほくそ笑む。

「いいぞいいぞ。流石は騎士、名を連ねる英霊だ。？輝く貌？ディ
ルムツド。時空を越え『英霊の座』にまで招かれし者だけのことは
ある。そうでなくてはならない。では、そうだな……こう言ってや
ろう」

身を翻し、傳くディルムツドと視線を合わせた和哉は言う言葉を
整理しながら人差し指を立て、

「俺は並列世界で既に既存のこの世界の概要を知っている。こと細
かく、遍く総てをな」

「総て？」

「そうだ、言葉通りだ。そのままに、俺はこの世界を知っているし、
ことの成り行きも熟知している。であるなら、まずは障害である邪
魔者を削除しておくのが至極真つ当で正しいだろう？」

この世界は既にいくつものifの世界、外史が生み出されており、
そこから枝分かれしてさらに新たな外史が誕生している。既存の世
界でありながら有する力はそこの基盤とする世界とはそもそも出
生から桁は違う。

そして、黒井和哉は現人神として、そして神として神格化された

ことで拡大した模倣による力の収得によりさらなる力に叡知も理解した。

と、まあ少しばかり話がズレたが、和哉の時間飛翔タイムトラベルはこれが初めてというわけではない。ならば、和哉は綴られている歴史を払拭し、世界の法則を保たせつつも崩壊を防ぐために破壊するのだ。

「ならば、主よ」

「ああ、そうだ。俺は原則に従うのはあくまでも最初のみ。故に、ここからは疾走するぞ。駆ける号砲になるにせよ、狼煙になるにせよ一気に動くぞ。世は総じて陳腐にさせぬように、そして俺の思惑通りに進行させるぞ。疾走するからこそ駆ける閃光は美しく、麗美でなくてはならない。

ただ、ディルムツド並びにランンスロット。お前たちのためにも舞台は用意する。楽しみにしている。邪魔なんかさせやしないさ」

『……はっ』

力強く家臣にそう告げ、また彼らもその主人の言葉を信じて共に頷いた。

第八話「第五次聖杯戦争」（後書き）

今回は近日中に投稿できる予定です。

ただし、少々こちらの事情で話が半分飛ぶ確率がありますが、あくまでも繋がっている話であるので、その所は長い目で見ていると幸いです。

では、またの閲覧。たのしみにしていきます

未知の結末を見よう（Acta est Fabula）！

第九話「乱入」(前書き)

どうも、マキナです

この休日の内にくつつか投稿するつもりでいます

では 我が劇場を御観覧あれ

第九話「乱入」

魔法陣の上で風に靡らせながら下界を睥睨する和哉の眼にはこの下の冬木市……ではなく、此の街の靈脈を視ていた。どの既存の世界であろうとマナが満ちている。それがどの程度の差はあろうと、人という概念が生きている以上、それは変わりない。自然界というならエレメント、この世界でいうなら魔力とマナがそれに当たるだろう。

「……やはり、純度の桁が違うな。靈脈が鳴動しているが、それも聖杯による影響か。靈地であつても余波は受け流せない、か」

紫と赤銅色で色彩で整っている靈脈を見つめながら和哉は嘆息した。汚染の度合いを見極めるまでもなく、すでに看破していた。澱みが濃ければ濃いほどそれだけ聖杯の影響が凄まじい。

「まあ、此の世界の竜には後でご対面するとして、だ」

そこで眦を下げ、黄金の双眸が見下す。その下には、赤い髪を短髪にした、真面目そうな少年。長く黒い髪をツインテールにした、美しい少女。黄色い雨ガッパを着込んだ小柄な人影。そして、霊体化しているサーヴァントを確実に見据えていた。

「あいつら、だな。確か言峰教会に行っていたはずだ。ならば、自然と事の成り行きを少しだけ静観させてもらおうとしよう……ランサー」

「ここで、初めて彼はデイルムツドのことを英靈名クラスで呼んだのだ。それが意味することはただ一つ。

「我が神名を以て命じる。柳洞寺に向かい、番兵であるアサシンと陣取っているキャスターを打破しろ。十全に魔力を提供する。宝具の開帳も許す。好きなだけやれ。己が真名を名乗ることも許してやる……おまえの好きにやれ。ただし、条件が一つ。

なんとしても、アサシン共にキャスターをお前の手で倒せ。

そして、キャスターのマスターは殺すな。いいな？」

「御意……仰せのままに。我が主よ」

今まで傳っていたランサーは待ちに待った命に脈動が早くなるのを理解しながら、己が命を静かに反復し、それを必ず成就させるのだと強く胸に刻みつけた。騎士としての誉れ高き戦ができる喜びに打ち震えているのだ。以前の戦争では思う存分戦うことが叶わなかったのだが、此度こそそれが叶うのだ。高鳴るのも無理はない。

主の命を受けて即座にランサーは一陣の光と化して目的地まで高速で向かっていった。

そのランサーを尻目に、和哉は既に交戦が始まっている戦いを見下しながら戦局を愉しんでいた。

「さて……此の世界の序章に踏み込むか」

そして、いよいよ序章の佳境に入った所でついに現人神が一柱に命を下した。

セイバーは地面に膝をついたまま動かない。

「トドメね。潰しなさい、バーサーカー」

少女の声が響く。

黒い巨人は、悪夢のようなスピードでセイバーへと突進する。

死ぬ。セイバーが死ぬ。それは間違いなく、セイバーはあの黒い巨人によって殺される。

それを理解した瞬間、衛宮士郎は即座に動こうとしたその刹那、

『止めろ、セイバー。大英雄の剣撃を消せ。ついでに余波も打ち消せ』

『……………ッ!?!』

「御意のままに」

そこに、セイバーの予知すら凌駕する未知が起きた。

唐突に、忽然と、只々その場にいた者たち全員が予想だにできない介入者の朗々と轟く声と共に、旋風が吹き荒れた。

颯風を纏いながら放たれた上空からの斬撃がバーサーカーが振り下ろした岩の剣を弾いた。

それと同時に空気を穿ちながら垂直に落下してくるその様は、間違いなくミサイルそのもの。

空爆の爆弾が地面に降り立った瞬間、地面が爆ぜたと同時に黒き影が旋風を纏いながらも空かさず狂戦士の顔面に向けて飛び跳ね、宙で舞いながら右の回し蹴りを鞭のように撓らせて放った。

予測の上に行く事態に全員が瞠目する中、その未知の介入者の攻撃の蹴りをモロに顔面に受けたバーサーカー。

そして、今まで相手の攻撃に微動だにしなかったバーサーカーの巨体が吹き飛ばされたのだ。十二の試練という最強の鎧を纏い、サーヴァント中最も防御力に優れ、対魔力も高いはずのあの巨体を事も無げに薙ぎ払ったのだ。

□

誰しもが言葉を失い、絶句していた。瞠目させ、摩訶不思議なものでも、珍妙なモノでも見たかのような表情を浮かべていた。この状況下において、既に最強の座に坐する三大騎士、セイバー・アーチャーが出揃い、加えサーヴァントの中でも最凶の狂戦士がいる。そんな中に新たな介入者は間違いなくイレギュラーであり招かざる存在であるのは明白。この聖杯戦争、いや……どの戦いにおいても乱戦のど真ん中に介入してくるなど自殺志願者に等しい行為だ。

そんな混乱とする中、旋風を纏いし存在は風を払うと同時に姿を現した。

その長身で肩幅の広い？男？の総身は、一分の隙もなく甲冑に覆われていた。が、セイバーの纏う白銀の鎧や、第四次聖杯戦争の時の英雄王ことアーチャーの豪華な黄金拵えとはまったく違う。

その男の鎧は漆黒だった。精緻な装飾もなければ磨き上げた色艶もない。闇のように、ただ底抜けに黒い。だが、それでいてどこか

何か認識がズレているように思えるのは錯覚なのか。

面貌すらも無骨な兜ヘルメットに覆われ視認できない。細く穿たれたスリットの奥に、不思議な形容しがたい真紅に輝く双眸の輝きだけがある。サーヴァント。それは間違いないだろう。だが、一体どの？クラス座？に坐す存在なのだ？

「……凜。君から見てどの程度の存在だ？」

「……分からないわ」

新たな乱入者に全員が動かぬまま静観する中、赤の主従の内の遠坂の現当主である遠坂凜に、尋ねたアーチャーの小さな呟きに対してその当主は首を振った。

「なに？」

「分からないのよ。あのサーヴァント、間違いなくあんたやセイバと同じ霊格の存在なのは確かなんだけど、観えないのよ」

ひとたび英霊と契約しマスターとなった者ならば、他のサーヴァントのステータスを？読み取る？ための透視力を授けられる。英霊を招いた聖杯から与えられる、マスターならではの特殊能力だ。アーチャーの正式なマスターである遠坂凜は、他のサーヴァントの能力偏差をアーチャーのそれと比較して、戦況をより有利な方向へ導くための策を練ることが可能だった。現に遠坂凜は、目の前にいるセイバーとバーサーカーの能力値をすでに透視し把握している。だが

「何なの、あいつ。明らかに普通じゃないわ」

「……………」

珍しく狼狽するあの誇りに満ちた主人に対し、鷹の目を冠するアーチャーは弓兵として高い視力と洞察力で注意深くその存在に視線を送る。

闇色の甲冑は、何の特徴もない没個性で、装着者の素性を物語るような手掛かりは一切ない。否、むしろ見れば見るほどに細部がぼやけ、ますます不鮮明になっていく。

それはアーチャーだけに言えたことではない。視認できないのは

むしろ、この場にいる全員に該当することだ。

何故なら、彼が誇り持つ特殊能力を兼ね揃えた宝具、？己が栄光のためでなく（フォー・サムワンス・グロウリー）？は自らのステータスを隠蔽する能力に他ならないのだ。如何なる高い能力を持つアーチャーにセイバーであろうと彼を識別することは不可能だ。それは、アインツベルンもまた然り。唯一、彼を識別できるのは彼を顕界させた存在と、同様に喚起された同じ英霊でなくては無理だ。

誰しもが動けない中、ただ一人例外がいた。そう この第五次聖杯戦争に招かれ、かつて第四次にも参戦していた白銀の騎士。セイバーを置いて他にいない。

「ああ……あああ。あなたは、まさか」

「……セイバー？」

ただ一人、セイバーは戦慄しながら身震いし、目を見開き驚愕していた。それは先程の驚きを軽く凌駕する驚き。もう決して逢い見えないと思っていたかつての友に他ならないからだ。

セイバーの主人たる衛宮士郎は震える心配そうに声をかけるが、彼女の耳には届いてはいない。

そう 顕界した彼の名は……

「ランス、ロット……あなたなのですか？」

「……………久しぶりである、王よ。あなたは相も変わらずのご様子で」

仮面の下からくぐもった声音で、白銀の王の呼びかけに漆黒の謎の黒騎士は応答した。それはまさしく互いを深く知る者同士のモノであり、そしてその名が示すのはただ一つ。

サー・ランスロット。彼の誉れ高き最強の騎士。騎士王セイバー
||サー・ペンドラゴンの上に行く随一の騎士にして友と称される人物、英雄に他ならない。

「ご健在で何より……ではあるが、お話は後で」

「ま、待つてくれランスロット！私は
あなたに謝りを……そう続くセイバーの言葉は、しかし

「静まれ、騎士王。貴様の無骨で無様な様をこの俺の前で晒すな……
お前は道化らしくこの舞台を色彩で彩り、華々しく散れ。道化風
情が舞台を慮るな」

『……………！？』

そこに先ほどの声が天から降り注いだ。

圧倒的な存在感を天から降り注がせ、その重みに耐えきれずに舗装された地面がひび割れ、コンクリートが陥没していく。通常の間ならまずこの圧力で圧死するのは必定。これで死なぬ存在がいるのなら、それは間違いなく一線を画する超人のみであり、事実それは証明されていた。

この場にいる全員が差異はあれどこの圧力の前に屈しはしていても、それでも尚抵抗していた。

（なんだ、これは？）

全員が訝しみ、その正体を知るため上を見ようとした瞬間、
ドクン！

強き鼓動音が鳴った。

それは体の心臓ではなく、心を震わす鼓動。魂を直接揺さぶらせる鳴動。それが徐々に高くなっていき、そして

「なるほど……黄金の真似事をしては見たが、中々どうして面白い。流石は衛宮切嗣の落とし子、欠落しているとはいえ、俺の圧力に抵抗できているのは中の妖精郷のお陰か。命拾いしたな、贗作」

侮蔑と軽蔑と称賛を言いながら天から降り立ったのは、黒衣を羽織った男だった。

首元からストラと呼ばれる司教などが礼拝の際に使用する帯のことであり、両手に嵌めた白い手袋の甲に魔法陣が刻まれ、黒き双眸は黒曜石のように美しくも荘厳に、漆の入った黒髪は男女問わずに

魅了する。

纏う色彩は多色彩で、その内の司る色として濃いのは？黒？？真紅？？白銀？？黄金？。そのどれも純度は高く、とてもではないがこの存在が下級であると断言するモノなど、恐らくは存在しないだろう。

ひび割れた地面に静かに降り立ち、対立していた両者の間に立つと同時に一度瞼を閉じ、再び目蓋を空けるとそこには黄金の双眸が爛々と輝いていた。神々しく、鮮烈に。

そう、今この時を以って現人神が第五次聖杯戦争に本来見えぬ存在として君臨したのだ。

『……さあ、これを以って今宵の恐怖劇グランギニョルを始めようか。期待してるよ、現人神』

『くくく……さあ魅せてくれ。卿の矜持、卿の誉れ。その総てをこの私にその閃光を、燃焼を、未知を見せてくれ』

その彼の雄姿を那由他の果てから見下ろす二柱の黄金と水銀は、ただ楽しそうに眺めていた。

第九話「乱入」(後書き)

次回、近日投稿予定

では、また皆様。我が劇場に来てくれること、お待ちしております

第十話「大英雄」(前書き)

どうも、マキナです

二週間遅れた分を取り返すつもりで投稿します
では、どうぞご覧あれ

第十話「大英雄」

第十話「大英雄」

「……な、なによあなた達。誰なの？」

闇夜に浮かぶ赤き深紅の双眸を宿した白雪の肌をした少女、人造人間^{ホムン} クルス アインツベルンが用意した天秤の守り手、聖杯の守護者、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

彼女は間違いなく、横槍を入れて尚且つ自身の自負する最強の狂戦士であるバーサーカーを退けた男を睨みつけていた。その鋭利な殺意は歳に不相応なほどに強力で、その双眸から伝わる嫌悪感は見取れた。

しかしながら、仲裁をした存在、黒井和哉もまたその少女を真正面に見据えながらも傍らに控えるセイバーを睥睨した。

アインツベルンの狼狽とする声はとうに和哉の耳に留まっていなかった。

「セイバー、やれるな？」

「無論」

もとより、既にランサーは柳洞寺に直行し和哉の下した命を実行しに向かったのだ。初戦が山門に立つ佐々木小次郎の殻を被ったアサシンの真剣勝負。キャスターの妨害はないだろうし、キャスターの場合は相手の実力を盗み見ることであり、探査などに出ているであろうライダーも同じ事は言える。

故に、初戦としてデイルムッドに戦闘させるのは隠匿関係なく、純粹にまずは己を依代にした上での実力を測ってもらうのが目的ともいえる。騎士道を重んじ奉る誉れ高き騎士の戦場を用意し、その上で相手を打倒し、即刻討ち取ったキャスターとアサシンの霊格並びに靈魂、それと核を回収するのが真の目論見。デイルムッドに利があるのと同時に、和哉にもそれ相応の利があるということにほかならない。既に第二魔法を会得し、こうしてランスロットとデイル

ムツドも顕現させているのだ、不可能なことはない。

「宝具の開帳は待て。相手は彼の有名な大英雄だ。加減は必要ないが、代わりにまずはお前の技量を確かめさせてもらうぞ」

「承諾した」

眼前に聳えるバーサーカーを見据えながらかつて狂戦士の“座”

クラス

として現界していた漆黒の甲冑を纏うランスロットは臆することなく、大英雄と相対していた。相手は恐らくバーサーカーのクラスとしては歴代最強のはずだ。ランスロットも強力ではあったが、彼のヘラクレスと比較するならそれは雲泥の差。片方は種でいうなら技術・技量であり、このヘラクレスは力の、それも暴力の塊のようなもの。

台風の目でありながら主人の命には忠実に敵を殺す狂った戦士。

それが……バーサーカー、ヘラクレスなのだ。ランスロットとはそういった格の違いが存在している。

「しかし、狂化してなおホムンクルスの命には従うとは、何とも皮肉なものだな。なあ、バーサーカー。そう思うだろ？」

そう問いかける和哉の表情は苦笑をすると同時に、哀れんでいるようにも見える。

「かつての大英雄ともあろう者が、何が悲しくてそのような傀儡に付き従う？ 心情に触れたか？ まあ、理性を失っても僅かに残るお前の心が守に値したのならそれはそれで構わんが、しかしだなあ……いずれあの穢れた願望機の器という贄になるのだから大して違わんと俺は思っが、どうだ？」

「……………」

粉塵が舞うその向こう側へ問いかけを掛ける黒井和哉は、その中にいる巨兵を見据えながらもさらに言葉をかける。

「まあ因果というものは懲りないものだ。十二の試練を受けて英霊の座へと昇華され、高みへと上った彼の英雄も今では単なる傀儡としてこの舞台で舞うか……演舞するのは別に俺には支障は来さないが、しかし主演にも主賓にも、まして脇役が舞台を慮ることは些か

酔狂とも取れる暴挙じゃないのか？ええ？問うが、なぜお前は聖杯の寄る辺に従い此の世に現界した、ヘラクレス。なにをお前を駆り立て、そしてなにを持って聖杯を欲しさせた？栄光か？そんなものは既に掴んでいるだろう、欲するのは傲慢だ。だが、お前はバカではない。誉れ高き大英雄、ならばこそその疑惑と疑問が残る。

故に、問う。なぜだ、大英雄。なぜ聖杯の呼びかけに応じた？」
諧謔も、まして相手を嘲笑うことを和哉はしない。それは偉大な男に対しての侮辱でしかない。誉れを残す大英雄を汚すことのないように、讃える和哉はそれが故に疑問が渦巻く。なぜ、と。

ランサーならば戦を、戦場を掛けるために応じ、馬鹿な騎士王は歴史の改竄を、アーチャーはこの現代にいる己の抹消を。各がそれぞれ胸に抱くその切望はどれも色があるが、しかしバーサーカーに関してはそれが無い。敢えていうなら、狂気に飲まれて枯渴したか、あるいは色を損失したか、いづれにせよこの狂化している男の魂の色が和哉の神眼を以てしても読めないのだ。

しばらくの沈黙の中、粉塵から現れた狂戦士はその赤き双眸が一度光り、

「……簡単なことだ」
「……っ！？」

喋った。あの理性を失ったはずの狂戦士が言葉を発したのだ。本来、狂戦士の属性を帯びたサーヴァントが理性を残したままでいられるなど正気の沙汰ではない。これはまさしく驚愕であり、その主人が一番驚いていた。

「バ、バーサーカー……？」
「ほう？理性が残っていたか。結構結構……だがしかし、ならば尚のこと答える。なに故に応答したんだ、ヘラクレス」

なお、この中で一番冷静である和哉は応答したバーサーカーに質問を投げかけた。他の英霊に関しては知っているが、ヘラクレスがこの現世において聖杯から排出された英霊の一角にして未だその理由は判明していない。疑問疑惑が総て払拭させて事を済ませるのが

和哉のやり方だ。

「……理由が必要なのか？」

「なに？」

「必要なのかと、俺はそう言ったのだ。聞こえたはずだ、現人神」

「さながらあの鋼鉄のように重い声でヘラクレスはその巨軀から和哉を見下ろしながらそう言った。しかも、この英霊……」

「ほう……聖杯の恩恵か？それとも何かバグでも起きたか？いずれにせよ、お前が俺を理解できたのは同じ神格を有するが故か。まあいいさ、お前が俺のことを理解できるのなら、なおのこと質疑応答してもらおうか。まさか、憚る真似はしないだろう？」

「お前は知識を探求するのか？」

「然り。だが、無理矢理詮索はしたくないのだが、如何せんお前に関しての記述は知っているものの、今回の聖杯戦争に参加したその意図を知りたいのは至極普通だろうが。それとも、俺を異常と捉えるのか。英雄殿」

「いや……だが、此の場においてお前たちは異物であるのは明白。ならば……」

そこでバーサーカーは言葉を区切り、右手に持つ石の斧を振り上げて、赤き双眸で和哉だけを見据えながら……吼えた。

「……………」

言葉にならぬ声で雄叫びを発し、狂乱している狂戦士が覇気を発すると同時に右の斧を振り下ろしていた。その斬撃は先程のセイバーに振り翳した時よりも威力と速度は増し、間違いなく最強にふさわしい攻撃なのは間違いない。並のサーヴァントが受け止められるはずもない、何故ならバーサーカーは座中最強の攻撃力と防御力を有し、イリヤスフィールというマスターからの魔力提供によりさらに強く強化している。高魔力を有するセイバーとて聖剣を解放しなければ厳しいだろう。

だが、その攻撃を前にして和哉は右掌を向け、

「見くびるなよ、大英雄。この程度の戯言で俺を見下すなど多少度が過ぎるぞ」

相手を見下ろしながら睨みつけた瞬間、バーサーカーの斧の斬撃はまるで見えない？何か？によつて弾かれたのだ。だがそれは武器などによる防御ではなく、強い防御壁のようなもので強く押し返されたと形容すべきだろう。

「ッ!？」

「驚くな、大英雄。俺のこれで弾かれたからといって、英雄たるお前の試練の数々に比べれば浅いものだろう」

そう言う和哉は、己が内に留めていた氣を？発露？させた。

金色の旋風が舞い上がり、そこに朱色の火花が辺りを散りながら彩らせていく。だがやがてその火花は蒼い炎へ転じていくと、それが徐々に双拳に纏つていく。

纏わせながら和哉は金色の双眸で大英雄を見据えながら淡々と語りだした。

「覇氣……というのを知っているか、大英雄殿。この覇氣というのは、人が有する氣……例えるなら、魔術師のような魔力と同じようなものだ。その氣を全世界の全ての人間に潜在する力、謂わば潜在能力というものだ。その覇氣の内、？気配??気合??威圧?などの感覚と同じセンサーのようなものだが、この覇氣はそう簡単に引き出せるほど容易などじゃないんだ。大凡の人間は気づかぬまま、あるいは引き出そうにも引き出せず一生を終えるのが関の山だ。

先程、お前の斬撃を弾き飛ばしたのは覇氣の内の一つ、武装色の覇氣というものだ」

対峙しながらも軽佻浮薄の和哉は実に淡々と感慨なく弾いた正体を暴露しつつも、その実大した話でもない。単なる手品師が披露する程度の小ネタでしかない。

「英雄殿。これから覇氣を魅せてやる……往くぞ」

「!!」

怒号が迸り、現人神と大英雄が衝突した。炸裂する衝撃波が冬木市中を荒れ狂う。

そんな中、ことの顛末に完全に乗り遅れたアーチャーのマスターこと遠坂凜は呆然とそれを見ていた。

「……な、なによ、あれ。あんなの、規格外にもほどがるでしょうが。このサーヴァントもおかしいけど、あの男はその上を行くわ。青天の霹靂なんて生温い。次元が違うわ」

「……うむ。気持ちは理解できるが、凜よ。今の私たちの現状ではここは彼にバーサーカーを倒して貰うのがよからう。見る、狂戦士のマスターを。先程までの余裕がないぞ」

そう指摘されて見てみると、先程まで人のことを見下して実に愉快で堪らないと残酷な笑みを浮かべていた白磁の少女は、その赤い瞳が揺れ動いていた。そこから推測して窺えるのは一つ……恐怖と畏怖の二種。

おそらく、彼女の経験上あのような存在は見たことも聞いたこともないのだろう。といっても、此の場にいる全員がそれに該当しているのだが、アーチャーは幾万の戦場を駆け抜けたその達観した鷹の目で洞察していた。

冷静に、それでいて確実に視る。

アーチャーは実に冷静に落ち着いていた。凜というマスターもいることもあるが、何よりも此の状況下ではもはやセイバーは使えないと、そう断じたのだ。その証拠として、騎士王は先程からバーサーカーではなく幾度なくあの黒い甲冑を着た謎のサーヴァントに語りかけていたが、それでも応答する気がないのだろう。無言を貫いていた。

（窮を要する……か。この状況、私とセイバーの計二人。凜はまあ動けるだろうが、この小僧は箸にも使えん。対して、相手には最強

のサーヴァント、バーサーカーとインツベルンの当主。そして何より、ブラックホースが中立地点にいる。

一体の謎の未確認のサーヴァントに謎のマスターであろう男。だが、明らかにあれは別格すぎる。人でありながら人の身を脱した異常者ではないだろうが……この感じる違和感、まさかあの男!?)

様々な経験と推測から導き出した答えにアーチャーは戦慄した。その答えが正しいのなら、彼らサーヴァントが手に負える相手ではない。それを担うのは魔眼を有する両儀の役目だ。

そう……神を殺すのは神殺しが人だ。

「……そういうことか。凜、彼が別格なのは仕方がないことだ」

「なによっ、あいつが何なのか分かったっての!？」

「無論だ。私の推測が正しければ、間違いなく」

次の瞬間、彼の言葉は凜へと届かなかった。何故なら、爆風と魔力の奔流が渦を巻きながら、狂戦士と現人神が基点にいたのだから。

第十話「大英雄」(後書き)

次回、今日中に投稿する予定です
では、また

第十一話「現人神 vs 狂戦士」(前書き)

どうも、マキナです

寒い中、暖房つけずに頑張ってます

では、どうぞ

第十一話「現人神 vs 狂戦士」

「疾ッ！」

「ッ！！！」

奔る剛拳と迸る狂気の奔流。バーサーカーが振るう石剣と覇気を纏った和哉の右拳が衝突するたびに衝撃波が生まれ、周囲に拡散していく。だが、和哉は神威を纏わずとも拳風があり、バーサーカーも振るうだけで既に颯風を纏っている。

激突はやがて苛烈に増していき、やがてバーサーカーが上段に構えたその瞬間、

「十二の試練を過信していないか？俺の覇気を舐めるなど、そう忠告したはずだぞヘラクレスッ！」

上段に振るうことで腹部が無防備となり、その刹那を和哉は賺さず覇気を両足に纏わせ、瞬時に右足による回し蹴りがバーサーカーの腹部へ当たった直後、炸裂した。覇気の内、攻撃に特化している武装色の覇気を和哉は極限までに高め、それを鋭利な刃のようにすることで殺傷力を普段は高めているが、今の脚撃は威力を最大限に高めた打撃。如何にバーサーカーの高魔力による防御があつたとしても、和哉の前では堅牢な鎧もないに等しい。

「ッ！」

直撃を喰らったヘラクレスの巨軀は吹き飛び、そのまま街灯に激突しその衝撃をモロに受けた街灯はひしゃ曲げて、また粉塵が舞うのだが、

「立てッ！」

粉塵の中にいる大英雄に間髪入れずに覇気を纏いし双拳がうねりを上げた。その剛拳は先程と寸分変わらずの威力を内包し、垂直にバーサーカーを穿つ杭に他ならない。

命ずる和哉の攻撃に対し、バーサーカーはその双拳を岩でできた剣で防いだ。防いだと同時に風が吹き、粉塵が晴れると未だに狂戦

士は健在だった。当然だ。宝具、それもAランク相当以上のモノでない限り命を刈り取ることはできない。堅牢にして最強と言わしめるのはその強固な肉体と宝具による十を超える命のストックがあるからだ。

ならばこそ、このヘラクレスが騎士^{セイバー}ではなく狂戦士の座^{バーサーカー}に坐したのはある意味で正解なのかもしれない。だが、それが騎士^{セイバー}であつても強敵には変わりない。騎士、というよりも英雄としては破格だ。大英雄と和哉が称するように、あの男は古今東西で名を馳せるほどの霊格だ。称賛に値する英霊の一角に相違ない。

「ッ！」

再び咆哮すると同時に、岩剣で和哉の剛拳を弾き飛ばし、即座に片膝立ちから転じて一直線にその剣の切っ先を弾かれた現人神の胸元に突き刺そうとするが、

「岩の剣でそのまま一直線にお前は直進してくる」

「ッ!?!」

言葉にならぬ狂戦士の驚愕の表情が浮かび上がっていた。何故なら、まるでそれを既に知っていたかのような自然な体の運びと動作は

「既知感……ではないぞ。これは覇気の内ですら特に相手の行動を読むことができる見聞色の覇気によるものだ。これを以つてすれば如何なる攻撃とて単なる先が見えた」

「!!ッ」

瞼を閉じて解説する現人神の言葉が言い切る前に、再び颯風を纏った大剣が上段から振るわれる。しかも、今度のはイリヤスフィーから提供されていた魔力を付与させた斬撃だ。物理攻撃と同時にによる攻撃は如何にこの男が神として手傷の一つは負わせられる。

その凶剣が振り下ろされた刹那、

「つまらない演目だ」

再び開眼された黄金の魔眼から尋常ならざる莫大な魔力が解放され、その奔流によってバーサーカーの斬撃は霧散させられ、再びバ

「サーカーの巨軀はさながら砲弾のように曲線を描きながら“ある方角”へ飛んで行った。

その飛んでいく先を見抜いた和哉は黄金の双眸でさらに一際光らせ、

「……ちようどいい。演出の場としてもあそこならここよりはいいだろう」

浮かべたその笑みは、今までの笑みとは異なる闘争そのものを愉しんでいるようであった。マントを靡かせ、ストラのルーンが煌めきを発しながら和哉はその場から瞬時に転移した。

そう　あの、墓場へ向かって。

「……まるで怪獣映画だな。あんな荒唐無稽な戦い、もはや武器と武器を使った戦ではなく、あの男の戦法は神の行いだな。仕方ない、凜行くぞ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！何あんただけ納得してるのよ！私にも説明しなさいよ！」

即座に状況を分析していたアーチャーは一つ頷いて一人呟きながら嘆息し、主である黒髪の少女を連れて行こうとするが、その主人が使い魔である英霊にストップをかけた。今現在、遠坂凜は混乱の真っ只中にいた。

確かに、これまで行われてきたセイバーとバーサーカーの戦いは人外ではあるもののあれは武器を介して戦っていたが、あの男との戦いは一方的だった。あのバーサーカーと拮抗しているように見せかけ、その実完全な高みからの攻撃は英霊を凌駕している。

その神域は神の業。抗えぬのは必定。だが、その真実に遠坂凜は解答を見出せていなかった。まだ実戦経験が足りず、魔術師としては上等であっても人外の戦いは未だに皆無。その上塗りとしてあの男の出現と先の戦い。どこから解決すればいいかなど、もはや理解

の範疇の外だ。

そんな彼女の心境を察したアーチャーはやれやれ……、と首を横に振り、

「君の言いたいことも分からないでもないが、まずはあれを見届けることが最優先だ。それに……」

「？それに、なによ？」

最後に言葉を濁すアーチャーに訝しむ遠坂であったが、

「っっ！！」

再び怒号と魔力の奔流。凄まじい突風が先の二人が向かった先からここまで吹き荒れる。その突風に凜は何とか堪え、アーチャーはそんな彼女の前に立って風を妨げた。

「セイバーは放置しておけ。その坊主もだ。まずは戦局を見極めるぞ、凜」

「……ええ、そうだったわね。常に優雅に。それが遠坂の家訓でもあったわ……行きましょう」

「ふっ、了解した」

腕を組みながらそう頷くと、アーチャーは彼女と共に坂を上っていき現在その戦いの基点へと走って行った。

第十一話「現人神 VS 狂戦士」(後書き)

次回、投稿予定

では、またどうぞ

意見や感想などがあれば嬉しいです

第十二話「投影」(前書き)

どうも、マキナです

早朝から張り切って投稿したいと思います

第十二話「投影」

坂道から外れた荒地 広い外人墓地に巨躯の塊がいた。吹き飛ばされた巨兵はただ静かに追ってくるであろう男を待っていた。

先の魔力の奔流はまさしく人外そのもの。さながら暴風の塊のようなものだ。如何に魔眼からの衝撃で弾かれるとはいえ、彼が誇る宝具は“屈強”であり、神秘そのものと比喩しても齟齬がない。

だが、その堅牢な宝具を有していようがああ男の前では関係がない。幸い、この場には遠視でイリヤスフィールが遠距離で見ている。あの場にはセイバーがいたであろうが、もう一体のあのバーサーカの初撃はいとも容易く弾き、難なく蹴り飛ばした正体不明なサーヴァントがいたはず。

理性がないバーサーカーにおいても、予測というものはできる。理性がない殺戮の塊であろうと、主人の命が守られることだけは理解していた。あのサーヴァントはセイバーと狂戦士の中立に立つことで牽制もしていた。

恐らく、その采配はあの男によるものであることは一目瞭然であり、その状況を看破していたその慧眼には感服というものだろう。

そして、待ち構えていた狂戦士の前に、現人神がついにその場へ転移を完了し、顕現していた。

「……さて、始めようか。といつても、この拳で戦っていたのはあくまで分かりやすく見せたがため。ここからは、俺も少々武具を使用させてもらうぞ」

先程と変わらぬ口調でそう言い、右掌を見せたと思われた次の瞬間、既に一振りの剣が携わっていた。

瞬間。それも瞼を一瞬閉じた刹那。そのコマ数秒の間にあの男は造作もなく武具と取り出していた。

「驚くことはない。これは余興だ、前座であることには変わらないが、せいぜい粉骨精神は魅せる。アインツベルンのホームクルスカ

らの魔力提供は十全。ならばこそ、その常時形成型の聖遺物を宿す肉体。己が力を、武勇を示せ。十二の試練を超えし最凶の狂戦士よ」

「言葉はなく、沈黙を貫く狂戦士。だが、ヒシヒシと伝わってくるバーサーカーの意思は実に簡単だった。

殺す、と。

くくく……、そうくつくつとほくそ笑む和哉は、黄金の煌めきに掻き消されないほどに存在感を醸し出していた。元々は現人神。人格化された存在が人の身のままで顕界し尚且つその存在を隠そうとしない。それはどう考慮しても普通ではない。

だが、黒井和哉は人から神格したのだ。くどいようだが、模倣神を前にして通常概念が適用されるはずもない。模して、模索して、それらを組み換え変革させて凌駕する。工程を偽装するやら積み重ねるやらは単なる傀儡がすること。模倣を冠する神がすることではない。

では、

「これを以って神座へ送る号砲とする。喜べ、敗北を味わせてやる」

「……！！」

一振りの剣を掲げたと同時に墓地の中心地点にいたバーサーカーはその巨軀から想像せぬほどに俊敏な動きで一気に間合いを詰めてきた。

互いの獲物は双方接近型。

剣と大剣。

違いはあれど、近づかない限り相手を打倒することは不可能。ならばこそ、狂戦士は先程の動作よりもより速い瞬速の動きで斬首する。そう判断したのだが、忘れてはならない。

相手が一体、何を胸の内に渴望し、何を冠しているのかを。

「……往くぞ、アーチャー」

低くそう呟くと同時に、大剣が迫る中、朗々と詠唱を紡ぎ始めた。

「I am the bone of my sword. 〽体は

剣で出来ている》」

その詠唱は和哉が現人神に成り立ての頃、それを儂くも麗美だと感じた最初の紡ぎ物。

「Steel is my body, and fire is my blood. 《血潮は鉄で 心は硝子》

I have created over a thousand blades. 《幾たびの戦場を越えて不敗》」

彼の内で渦巻く“その者”の渴望を利用することを和哉は厭わない。何故なら、その者とは既に他世界において盟約を結んでいる。

ならばこそ、この世界において最初の戦いで使用するはこの詠唱をおいて他にないだろう。

「Unknown to Death. 《ただの一度も敗走はなく、》

Nor known to Life. 《ただの一度も理解されない》」

次々と彼の深層世界に剣が地面に突き刺さっていく。その影響は彼の内で渦巻く能力と契約してきた者達によって抑制できている。

「Have withstood pain to create many weapons. 《彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う》

Yet, those hands will never hold anything. 《故に、生涯に意味はなく》」

さあ、今こそ解き放とう。軛から解放し、その真なる力をここで示そうではないか。

黒井和哉は模倣神。そして、内包する気質は霸道型。であるなら、指揮官としてもまた彼は他者の能力で相手を打倒する存在。

顕現する禁忌の中の禁忌。

その銘は

「So as I pray, unlimited blade works. 《その体は、きつと剣で出来ていた》」

無限の剣製なり。

第十二話「投影」(後書き)

最近暑かったり店内が寒かったり外も寒かったりと、随分と気候の変化が激しいですが、健気に頑張っていく所存です。

第十三話「固有結界」(前書き)

どうも、マキナです

続いて、連続で投稿致します

では、我が劇場を御観覧あれ

第十三話「固有結界」

瞬間。

何もかもが砕け、あらゆる物が再生した。

炎が走る。

燃えさかる火は壁となつて境界を造り、瞬く間に焰が墓地全体を
奔り、世界を一変させる。

天には、黄金輝く怒りの日を連想させる黄昏

地には、不吉に長い影を伸ばす無限の剣の葬列が並ぶ荒野

この剣の荒野こそ、かつて衛宮士郎が極めに極めた究極の一にし
て唯一の「魔術」の顕現。英霊アーチャーの宝具、リアリティ・マーブル
無限の剣製』。アンリミテッド・ブレイド・ワークス固有結界

その光景に狂戦士は何を思つたのか、岩石のように強ばつた表情
でただ静かに沈黙していた。狂戦士はこの異様な世界に疑問を抱か
ず、ただこの世界の中心で君臨している世界王に視線を向けていた。
先ほどと寸分変わらずに静かに直立していた。黄金の双眸は濁らず、
爛々と煌めき、目映いほどに神々しい神氣が滲み出していた。首から
垂れ下げるストラの一つ一つのルーンはそれぞれが意味する付与能
力を宿したまま健在で、白い手袋の甲に刻まれた魔法陣が脈動を打
っている。錯覚させるほどに波動を発していた。

右手に握られる一振りの素朴な剣が先ほどまであつたはずだが、
それが今消えていた。そのガラ空きとなつた右掌を少々見つめてか
らバーサーカーを見据える。

それだけで戦慄した。バーサーカーは今までの漢を見誤つて
いたのだと理解した。先ほどまで嘯き他者を剪定していた男が仮だ
としたら、今の男こそが本当の意味での現人神としての実体。

たなびく髪は漆黒。

この世の何よりも鮮烈であり華麗であり、荘厳で美しくもある黄金。

「大英雄。どうだ？」

この異世界の覇者は両手を広げて、この世界を紹介するように動作で示す。

「固有結界……魔術世界において禁忌中の禁忌。禁忌タブーとされる禁忌手だ。自己の心象世界を現実に侵食させ、現実を現実ならざるものに変化させる大禁術。自己と世界を、境界をそのままにして入れ替えるもの。聖堂教会や魔術世界で度々執行すれば代行者などが動くが、これは確かに禁じ手だな。使用してみても、そう感じる」

この世界を見据えながらも目を細めてそう呟く和哉の表情は、何かに似ていると、そう物語っていた。

確かに、この固有結界は空想具現化と酷似している。規模のデカさは比例はするが、世界を喰い破るという点では共通している。

マーブル・リアンタズム
空想具現化と呼ばれる自然界の触覚である精霊真祖が自己の意思と自然を直結し、確率に干渉して意図的に自身の都合のいい世界に改変する能力であり、術者が世界の一部であるがために、自身の思い通りの世界を作り得るのだが、自然から独立したものは操作できないという点がある。

できたとしても、それは間接的に干渉するしかない。

この自然の世界で動物ならば操作が可能であり、また、精霊の規模により具現レベルには差がある。千年城ブリュンスタッドがちよつどいい例だ。アルクウエイドがそもそも規格外であり、触覚そのものとも取れるので、あれ以上に空想具現化と比較できる者は存在しない。

ただし、此の場にいる現人神を除いての話だ。

「さあ、始めようか。吟じるのもいいが、やはり闘争を愉しむのも一興だろう」

徒手空拳の状態で現人神は再び狂戦士とこの異空間での戦闘を所望している。バーサーカーは相手の強さを嫌というほど理解してい

る。故にこそ、全力全開、彼が誇る武力で叩き潰すしか道はない。

その気構えを既にその魔眼で捉えている和哉は、薄く笑みを浮かべ、

「Oh! Welchen Wunders hochstes
Gluck! 《おお 至福もたらず奇跡の御業よ》

Der deine Wunde durfte Schlie
sen, 《汝の傷を塞いだ槍から 聖なる血が流れ出す》」

祝う祝福の喝采を讃えると同時、再び朗々と詠唱が紡がれていく。
「ad astra per aspera. 《苦難を通して星々

》
dum spiro, spero. 《息をする限り、希望を抱く

》
「彼が宿す渴望を顕現させる第一の一章。

希つのなら、この固有結界の中で重複させることでより堅牢とさせる。

「dum vivimus vivamus. (生きてる限りは楽
しもう)」

渴望に喰われるのなら、喰われる己を保ち、そして凌驚しつつ超越するのが妥当というもの。

「Alle Sachen, aus denen ich fl
iese, und Widerstand fliest au

s wie Wasser. (流れ出ずる万物は水の如く流れ出る)
」

さあ、祝え。英霊エミヤよ。お前の投影を、俺が再現させてやる。
「Briah 《創造》」

「Alles verandert sich standig.
(総てが流転する)」

炸裂する魔力の弾丸。魔力で編まれた魔弾が和哉の総身から放出されていき、無限の剣の軍勢一つ一つに激突する度に付与されていく。

既にこの剣の丘に突き刺さっている剣総てが魔剣・聖剣の類そのもの。魔槍に聖槍もこれまた然り。それにさらに付与されていくのは、一つの武具でありながら他の宝具の効力を得る、謂わば一つの武具にして無限の軍勢レギオンということになったのだ。

軍勢変生と呼ばれる本来は他者を疑似的に神格化するという能力を総じて底上げるものだが、これは武器を無双にさせるといふもの。和哉が宿す渴望が帰来するからこそその荒唐無稽だ。他者が如何に高位な存在であろうと模することは不可能というもの。

「 往くぞ、大英雄。十二の試練は十全か」

「 !!!」

再び、この固有結界という異世界で第2幕の戦が開幕したのだ。

第十三話「固有結界」(後書き)

煮詰まらずに進行できるのが良い、と思っています。
では、続いて投稿すると思いますので、ご期待あれ

第十四話「第二幕」(前書き)

どうも、マキナです

久々の投稿となります

深夜からとなりますが、どうぞ

第十四話「第二幕」

疾駆する和哉が最初に手に取ったのは、方天画戟だった。彼の最強と謳われし武将が携えていたその獲物は真正銘本物。如何に投影による世界とはいえ、ここでは総てが本物。それが内包及び蓄積してきた経験などは総てが凝縮しているのだ。

軽々と地面から抜き放ち、徐にそれを正面へ投擲すると、それを当然の如くバーサーカーは薙ごうとするが、

「ッ！」

触れる寸前の所で大剣を引き、その体躯で身を翻した。僅かな瞬間で回避したと同時に投擲された宝具は地面に突き刺さり、粒子化して再び和哉の手元へと戻っていた。

「いい勘だ。読みも悪くない。怪物たちとの戦いは強ち良き経験となつてたようだな……結構結構。いや、僥倖というべきか」

再び方天戟を片手に構え佇む現人神は、実に優雅に佇んでいた。

先の宝具の投擲は無謀から来るものではない。

「先程も説明したと思うのだが、俺は模倣神。他者の渴望と能力と武具は俺のもの。これは傲慢からくるものではない。黄金の獣の言動を拝借するなら、組み替えることで己へと編成しているのだ。謂わば、能力の数々は俺のレギオン。模倣を冠するその所業を前にどこまで絶ることができる？」

つまり、一つ一つが複数の宝具という言い方に変換できることもない。一つ一つが本来有するその特有の能力。それが模倣神による介入で既に一つにして軍勢と化している。ならば、行き着く回答は一つ。

「投擲しようともその使用者の元へと戻り、穿てばその命を葬り、邪魔をするのなら相手の魔力を両断し、手傷を回復させぬ呪いを与える。枯渴に束縛は俺の領分ではないので、流星にあいつらの能力は発現できないが、しかし……」

言い切る前にバーサーカーが疾走する。此の世界が現人神の世界であろうとも、相手を斃さぬ限り、己が主人の命が危うい。ならばこそ、己が命を削るうとも、この者を抹殺しなくてはならない。

脅迫概念に刈られた狂戦士が岩の大剣を振りかざし、即座に凧ごうとしたが、

「話は最後まで聞くのが常識だろ？ 弁えろ、英雄殿」

左手にいつの間にか握られた翠色の短刀を振るわれると、バーサーカーの右一面が氷付けになった。魔力が変換されて水が凝結して凍結されたことで氷へと変じ、そして相手の指定した空間を凍り付けにしたのだ。

宝具の多用はともかく、この空間内にある宝具は須く贗作^{フェイク}。だがしかし、この神が使用することで贗作だろうと本物へと変革される。もはやこれに打ち勝つには超越するしかない。

「……といっても、俺も易々とそれを許すはずもないがな」

バーサーカーは即座に凍った右半身を渦巻く魔力で解凍させ、即座に振るわれた大剣を右手に握られていた方天画戟という武神の宝具で受け止め、数十回の剣戟が再び始まった。

閃光が散り、火花も散る。互いの獲物で斬り合う中、刃と刃、力と力で暴風が発生する。

「剣軍……」

鬨ぎ合いをしながら鏢迫り合いの状態で低く呟いた瞬間、当たりに突き刺さっていた剣が独りりで宙に浮かび、その矛先を対峙している狂戦士へ向けられた。

「ッ！」

狂戦士は理性が飛んだ状態から瞬間的に意識を戻し、瞠目した。説明した通りならば、あれらは一つ一つが銀河を滅ぼす総軍だ。数は約30本。出鱈目なんてもんじゃない。

「射れ！」

「ッ！」

瞬間、放たれると同時に総軍が一斉に爆走した。

狂戦士は罅迫り合いの状態から大きく和哉を弾き飛ばし、その剣軍を最大限の力を持って振り下ろした。

爆発と轟音。絨毯爆撃のように尋常ならざる剣が地面に接触する度に爆破と共に魔力の奔流が世界を覆う中、バーサーカーの咆哮が地を揺らす。

「ほう……？ 凌いだか、あれを」

Aランク以上の力を内包する宝具の数々。伝承から受け継がれその能力はその伝承に沿った通りの力を有し、中には神聖を殺す能力に吸血殺しなど多種多様だ。そんな中でもこれらは総てが各々の能力を有しているのだ。如何なる大英雄といえども死を免れないだろう。だが、現に狂戦士は外傷を負いつつも致命傷には至っていない。恐らく、最初の一振りで叩きつけ、粉塵が舞う中で防げるものは防ぎ、薙ぎ、躲し続けたのだろう。

何という出鱈目。先の攻撃がご都合なら、そのご都合を見事耐え抜いたこの巨軀の英霊は怪物だ。最凶の異名の冠するだけのことはある。

完全に剣軍を受け流し切った狂戦士はその場から後退するがために大きく飛び退いた。

「よくぞ耐えきったぞ、バーサーカー。その巨体でよく動けるものだ。俊敏に加え強力とは……トバルカイン並だな。まあ、あれは死人だからと結論付いてしまおうがな」

飛び退いたバーサーカーを見ていた和哉が左の宝具を雑に放り投げ、左掌を見せたかと思われた時には、既に新たな宝具が握られていた。

それは一本の赤き魔槍。刺されたが最後、因果を捻じ曲げ命を取る死神の槍。

刺し穿つ死棘の槍。ゲイ・ホルク

因果を逆転させて「すでに心臓に命中している」事実を作ったか
ら槍を放つので、確実に当たる必中の朱槍。槍を放つよりも前に槍は心臓に命中しているがため、結果が作りあがった後になにをしよう

うとも回避も防御も不可能。この呪いの槍を有する獵犬とは未だ出くわしてはいないが、いづれ合間見える時は一度ぐらいは手合わせ願いたいというもの。

「さあ、鼓舞して舞えよ英雄よ。エイソフエリア この槍から逃れられると思うなよ、狂戦士。俺が振るうという時点で既に神器だ。抵抗するならしてもいいが、無駄な浪費は避けてはどうだ？」

そう軽いいながら振るう朱槍。真名を告げて放ったが最後、バーサーカーが抗うには、その因果ごと消し去る運が必要である。ならば、

「ッ！」

強行突破。この第五次聖杯戦争に参加したなかで最強の座に坐す狂戦士がむざむざ殺やられる道理はない。

怒号を発するバーサーカーはまさしく理性の飛んだ怪物。獣じみた咆哮が浸食した世界に轟く。

ビリビリと振動するこの突き刺す殺気は、やはり狂戦士故だろう。右手に握られていた方天画戟を地面に突き刺し、左手に持つ宝具を右手に持ち変え、再び武具と武具との激突が再開された。

剣と槍との剣戟。ぶつかる度に激しい金属音と火花が散り、より速度を加速させていく。そんな中、黒井和哉は狂戦士の赤き双眸を黄金の双眸で見据えながら、まるで説くように語りだした。

「闘争とは、霸道とは世界と世界との鬨ぎ合いだ。己が闘争本能を仰ることが人に課せられた罪であり、それを解放したのが英雄だ。汝も同様に守るがために闘った。否定はするなよ？ギリシヤ神話の行程が崩れるからな」

左側面から首筋に落とされた大剣の一閃は、おそらく他の者なら何が起きたかも分からぬうちに両断されていただろう。その一撃はまさしく神速。

ゆえに、ここで真に恐るべしと言うならば現人神だ。残像さえ残さない剣速は目に映らず、しかもそれを防御してのけた技量は超常などというレベルではない。

それは紛れもない魔性の絶技。ぶつかり合う刃と刃が火花を散らし、弾ける剣戟の轟音が物理法則の断末魔を響かせる。

「
」
躲し、逸らし、防ぎ続ける。

最初の一撃を凌いでから、すでに繰り出された斬撃は五十を超えた。

狂戦士の剣技は幾多もの怪物たちとの闘争によって養われ、研いできた真剣そのもの。それらがどれも強力無比であり、剣を振るえばそれが魔剣と化す。颯風を纏いながら相手を屠殺するその所業こそが英雄たりえる理由だ。

背後からの唐竹割りのを和哉は掲げた朱槍の石突きで受け止めている。続く右側背からの切り上げも、先の衝撃を逆利用した梃子の原理で防御が攻め手を先んじている。

つまる所、経験則に基づく洞察力こそが現状で無双している和哉の現人神としても尚現状維持しているのだ。

黒井和哉は他者を統べる統率能力に長けている。故に、周囲に対しての敏感な反射速度を有している。有していなければそもそも彼が如何に稀有な渴望を有していてもこれほどまでに卓越した存在になれる道理はない。

「やはり、狂化しても尚堅牢だな。徐々にはあるが慣れてきたか
いや、少し遊び心を付けすぎたようだな」

気負いなくそう言うものの、ある意味で和哉も一種の驚きがあった。なぜなら、ここまで和哉が如何に力を僅かしか解放してないとはいえ、それを防ぎながら罅迫り合いをしてきたのは、類を見ないほど。

常人ならば即死な攻撃を難なく往なす和哉だからこそその分析だ。アーチャーならば同じ事は可能であろうが、苦戦は免れない。

超人と超越者。英雄と神。信仰によるモノ、そしてどうしても格差がついてしまうのは、神聖並びに力だ。

「しかし、よくぞ俺の剣戟に付いてこれたな。褒めよう。大英雄殿

「いよいよ楽しくなってきたが……」

そこで不意に見せた表情は、この戦いを至極惜しんでいるモノで、「潮時、か」

同時に身を翻して大剣の斬撃を回避してその場から大きく飛び退き、

パチン

軽く指を弾く音と共に、さらなる展開がこの冬木市にいる聖杯戦争関係者に激震を起こした。

「な……嘘ッ!?!」

「この反応、柳洞寺からか」

赤き魔術師と弓兵は墓地に向かいながらその起きた現象に反応し、

「……この魔力、まさか!?!」

「な、なんだ……これ」

未熟なマスターと騎士王は驚きを隠さず、

「予定通り、ということですか。主よ」

唯一、騎士王を抑止している黒き騎士だけはその鳴動している事柄に察しが付き、一人フルメタルの甲冑の下で呟いていた。

そう、全員が向ける視線の先　そこは、赤紫の閃光の柱が一柱天の階のように昇っていた。

「ここまでだ、キャスター。我が騎士道を阻むことは何人たりとも許さない」

境内で粉塵が舞う最中、赤黄の双振りの魔槍を携えながら佇む槍兵がいた。悠々と立ちながら一瞬の油断も慢心も欠片も存在しない槍兵は、その如何なる女も魅了するその魔貌で目の前で片膝を立て

ながらも既に背水の陣であることを理解している黒きローブを羽織ったサーヴァント、キャスターを見据えていた。

「……くっ、はッ」

息も絶え絶えであり、既にこの境内に満ちていた莫大な魔力は既に枯渴しきっていた。魔法を行使できるほどの魔力はもはや微塵もない。

しかし、それはある意味当然といべきだろう。なぜなら、彼が振るう宝具……赤い槍は、魔力を断つのだ。

本来は魔術の効果の根元から破棄したり解除するほど強烈なものではない。だが、此度振るわれるその槍の効果は本来持ち得ないほどの力を内包しているのだ。

刃の触れた刹那のみ。その刹那だけ魔力の流れを遮断し、無力化する。それが本来の赤い魔槍の効力。だが、和哉という最強の主人がいることで、その元来持つ能力を底上げしている。

サーヴァントの武装の優劣は、それが帯びた魔力や魔術的な効能によって決すると言っても過言ではない。だがこのランサーを前にしては、強力な武装を誇るサーヴァントほど、その優位を覆されてしまう。

キャスターは境内に陣を張り、人の精気を吸い取る行為をしていだが、それも肥やし続けていたがためにランサーとは相性が最悪なのだ。

宝具『破魔の紅薔薇』ゲイ・ジャルグはあらゆる魔力の循環を遮断する事が可能だ。一時的、一瞬消すのが通常の効力なのだろうが、神からの提供される魔力は確実に宝具の域を飛翔していた。

打ち消すと称するなら、これは抹消だ。魔力で編まれ形成されたものなら問答無用で霧散させる。近接に不向きなキャスターとではランサーの魔槍を破ることはできない。最初から大魔術を行使していればまだ勝機はあったのだろうが、もはや勝利する確率は風前の灯火。

「勝機はないぞ、キャスター。今のお前は大魔術を発現できるほど

の魔力を保持していない。境内の魔力でまだ抗うのなら、英霊としての介錯だ。仕ろう」

「……ふ、ふふ。甘く見ないで下さらない？ 私はまだ」

「先に宣告するが、我が宝具を前にして姑息な手は効かん。最初に述べた通り、お前のマスターには手を出さん」

双槍を構えながらもランサーは相手の抵抗しようとする心を通つていく。これ以上は単なる消耗戦。キャスターもタダでは済まないだろう。

「抗うのなら、と俺は言ったがもはや境内に止まっている魔力はない。我がゲイ・ジャルグを前にしてもはや魔法の真似事は効かん。

お前の持つ宝具も意味をなさん。大人しく、空しく滅び去るがいい」
死を告げる槍兵はここで黄色い短槍の矛先をキャスターの心臓に照準を合わせる。それだけで相手を威圧するだけのモノがある、ということになる。

確かにデイルムツドの言うことには一理ある。この黄薔薇も治癒を許さぬ呪いを宿しているが、そもそも彼女の持つ破戒すべき全ての符はあらゆる魔術を初期化する、すなわち契約であろうと無効化するだけの効力を宿す裏切りの宝具ではあるものの、それはもはやデイルムツドに限って言うならもはや意味はなさない。聖杯の軛から解き放たれたランサーは此の世の理からズレている。あの男は一人にして総軍。単体でありながらも大宇宙そのもの。であるなら、導き出されるその答えは至極簡単。欠伸が出るほどに。

ランサーに聖杯に縛られているサーヴァントの宝具は効かない。

それはセイバーことランスロットにも言えたことであり、彼もまた例え刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグであろうと刺し殺すことは出来ない。

そして、ここで無慈悲に黄色き魔槍の切っ先を躊躇なく心臓めがけて 穿った。

「

言葉はない。ただ、苦悶の表情もなくキャスターはただ静かに、

「……宗一郎様には」

「安心しろ。我が主は約束を違えん」

半透明になつていくキャスターの眩きを聞き取っていたディルムツドは刺し殺した女狐の言うことの先を言った。

それで満足したのか、彼女は今の今まで相手を嘲笑う笑み以外の、初めての微笑みを浮かべながら消えていった。

「任務、完了」

境内から完全にキャスターの存在が消えたことを確認したランサーは、己が任務を成就させたことをここに宣言した。

アサシン。山門で門番をしていた佐々木小次郎の殻を被りし英霊を打倒し、そしてキャスターを己が手で確かに斃した。

これを以て和哉が命じた命を完遂したランサーは身を翻し、即座に此の場を去ろうとする前、

「と、忘れるところだった。こいつらの？これ？も持って行かなくてはな」

宝具を解除し、その？ある物？を掴んでから今度こそランサーは主の元へと帰還を果たすべく柳洞寺から飛んでいった。

「見事」

固有結界を解除した和哉は柳洞寺のある方角を見ながらそれを成し遂げた己が英霊に賞賛を与えた。目的を完遂した己が臣下に流石と称賛を与え、その実力を広めたことに彼は満足していた。

「そして、退け。狂戦士としての矜持があるのなら、その片隅に追いやっている理性で戦線を離脱しろ。アインツベルン！聞こえているだろ！この場を退け！退かぬのならこの英霊はこの場で死してもらうことになるが、如何に？」

「ツ退きなさい！バーサーカー！」

「そして、和哉が狂戦士を退かせるがために遠視で見ているアイン

ツベルンのホムンクルスは、和哉のその言動に怒りはしたものの、未確定な存在よりも狂戦士を一時帰還させることを第一に考えてしたが故だ。

主の命を受けて戦意を無くしたヘラクレスは踵を返し、一度振り返りその赤き双眸で大魔術を行使した現人神を見てから、もう一度踵を返してから此の場から急速に離れていった。

さて……、と己が右掌を見てから隠れている二人の魔術師と英霊に声をかけた。

「狙撃したいのか、それとも傍観が希望なのか？まあどちらでもいいが、アインツベルンが退く以上、これ以上今宵の戦に意味は成さない。退きたまえよ、少女」

「……………」
ストラを優しく撫でながらそう呼びかける男の言葉に黒髪の少女、遠坂凜は沈黙を貫いていた。別に彼の言動はおかしくはない。今宵の敵である本来のバーサーカーとアインツベルンが後退した以上、もはやこれ以上の戦いに意義はないだろう。

だがしかし、彼女、否。魔術師だからこそ見逃せない事実を彼女は口を開いて告げた。

「……………何者、あなた？」

「ん？」

「固有結界……………心象風景を具現化させる大禁呪。それを行使して尚抑止力が働かないなんて、死徒でも不可能だわ」

制限時間は掛かるものの、固有結界を維持できても死徒ですら容易ではない。それをこの男はお構いなしに固有結界である禁忌を執行し、尚且つ己が意志でそれを解除したのだ。これを異常といわず何とする。

「当然の疑問で論点もまあ外れてはいないな。だが、抑止がかかる

のは悪までも根元に辿るや」「に辿るなどをした場合にあれが始動する。まあ固有結界程度では抑止力は掛からんよ」

柔らかな笑みで、どこまでも優しい表情でそう言う和哉に対して、凜は不思議な違和感を感じていた。それは、そう、まるで

「大好きよ、和哉」

ノイズ 雑音。 ノイズ 雑音。 ノイズ 雑音。

擦り切れた記憶おもいでの再生。彼とは初対面のはずなのに、まるでこれは何回か合った邂逅のように

「ん。リン、凜ッ！」

「っ!? な、なによアーチャー。そんな大きな声を上げて」

ふと、隣を見れば弓兵が声を掛けていたことに今気がついた。

一瞬。ほんの瞼を閉じた僅かな時間、コンマ数秒ほどだがそれだけの時間で彼女の意識は飛んでいたのだ。

しかし、今垣間見たのは一体

「既知感」

「ッ」

静かに遠坂たちを見ていた和哉は先程の魔眼ではない漆黒の瞳で見据えていた。静かに立つ様は美しく、芸術的でもある。

今の彼の口から出た言葉。それがとても重く、重大な意味合いを持つ単語なのだと、瞬時に遠坂の当主は理解した。

「いつ、どこで、どのように出くわし、我々が邂逅したのか……思いつくすな。その既知感をなぞるな。永劫回帰の桎梏に縛られるべきではないはずだ、お前は。共闘すべきは衛宮士郎、俺ではない。反対の世界に坐す男と共に歩む？馬鹿も休み休みに言え」

その弾劾とも取れる彼の口端から漏れ出す言葉と感情は、決して蔑ろにできる類の薄っぺらいものではない。

ある白貌は血を求めた。飢えに飢え、拳げ句の果てには吸血し、愛するものを枯れ果てるまで喰らい尽くすという虐殺の化身。

血と暴虐と耽美の魔人 闇を飛翔する不死鳥。

そんな男がかつてはいた。見てきた異端児アルビノはあいつをおいてここ

までの奴はそうはいない。既に逝ってる白騎士はいたのだが、それは畜生の権化だったのだ。

その男が追い求めた渴望、そして黒井和哉の渴望は道は違えど高純度の祈りという点に関しては同じ位階にある。

望みし渴望は亜種か神聖か、差はあれどどちらも水準など持ち得ない。己が渴望こそが全。己が世界こそ至高。他者の渴望は己が異界の二の次。所詮は雑多に過ぎない。

最凶にして最強の自負に自信こそが完成された己なのだ。

「……………」

そう諧謔しながらも、自嘲し己を嘲笑っている男に対して、赤き弓兵と魔術師は沈黙していた。その姿に、言いしれない何かを感じ取っていたのだ。ただし、それは例えるなら風、もしくは無。

虚無と形容したほうが妥当であろうか。己は確かに他者の追隨を許さぬが、それでいて世界から確実に逸脱した己は怪物、化け物と軽蔑・侮蔑している。空虚ともいえるが、この男は言いしれない強き意志を宿しているが、己の破滅さえも渴望している。そう感じ取ることができたのだ。

「…………沈黙を貫く場面を履き違えるな。それに、ようはそれは幻視だ。忘れる」

そこまで言って身を翻して、

「まあ座興はここまでだ。いづれ君とは語らいものだな、凜。そして…………アーチャー。その時まで、せいぜい生き残れよ。此度の聖杯戦争、中々どうして面白い」

二人の存在を視ながらも、和哉は確かにこちらを睨みながら狂戦士の肩に乗って森の方へいく白き雪の少女を視ており、尚且つランスロットが消えたと同時に森の方へ衛宮士郎を置いて高速でこちらに向かって駆けてくるブリテンの王さえも「観測」していた。

「アウフ・ヴィーダーゼーエー
」ではな。Auf Wiedersehen」

「ま、待ちなさい！まだ話は」

そのまま立ち去ろうとする和哉の後ろ姿に声を慌てて掛ける遠坂

であったが、すでにこの墓地には赤き主従を除いて他には誰にもいなくなっていた。音もなく、颯爽と。

それはさながら、この場には最初からこの二人しかいなかったかのように

第十四話「第二幕」(後書き)

次回、第十五話を投稿する予定です
ではまた。

第十五話「解放」(前書き)

久方ぶりの投稿です。少々事情があつて投稿できる状況ではありませんでした。
では、どうぞ

第十五話「解放」

「ふふふ……いや、興が乗るものだ。此度はやはり度し難いな。一度は視ているものの、やはりこの戦争に参加する意義が見いだせるといふもの。ランスロット、デイルムツド。お前たち二人を聖杯から解き放つことが出来たのは僥倖だった。おかげで俺も満足してよ。」

先の戦闘を事も無げに言い捨て、赤き主従との邂逅を終えた和哉は、再び遙か上空に敷かれた黄金の魔法陣の上で見下ろす覇者は睥睨していた。

この世界の理は既に読み解いている。そして、仕組みを理解しているからこそ、この戦いの本質も見透かしているのだ。

「主が満足そうだなによりだ。私も同様に、彼の剣豪と魔女との闘いは中々私も良きものであった。」

「……………」

その後ろで傳く二柱の英霊は、己が現心境を吐露していた。

ランサーは命じられた主名を遂行したと同時に、門兵と魔女との死闘は騎士としては誉れというもの。奇策や奇襲などというのは騎士道とは異なる。真つ向勝負こそが正道にして王道。それをこの男は理解した上で命じたのだ。だからこそその主への感謝なのだ。

「そうか……それは結構。それで？デイルムツドよ。例の？あれ？はどうした？」

「はっ！ここに、我が主」

後ろを睥睨して施すと、デイルムツドは即座に理解してその？ある物？を見せた。

デイルムツドが取り出したモノ……両掌の上で爛々と輝くそれは、英霊の？核？に他ならない。

俗に靈魂と呼ばれるそれは、今は丸い球体状で現出し、群青色と紫色で染められており、脈動が鳴っているのがわかる。聖杯が敗れ

た英霊の核を取り込もうとしているのは明白だ。

しかし……

「大聖杯よ。お前の思惑通りに行かせるほど、俺は甘くないことは承知のはずだと、俺は思っていたがな。落胆させるなよ、アヴェンジャー」

どこまでも事の真相を見通す和哉は、その球体を受け取り、右掌に二つ乗せてから深々と見つめる。

小刻みに震えている靈魂は、すぐに聖杯の方に行こうとするのだが、その程度の抵抗など無きに等しい。

「さあ、刮目しろ聖杯。再び、俺が現人神として刻ませてやる」掲げるように右掌をさらに天に見せるようにして、和哉がそう言うと同時に、高い鼓動音が一際高く鳴った。それはまさしく、二柱の英霊を取り除く時と同じ現象だ。

本来なら抑止力が作動するはずなのだが、何故か機能しない。それはどうということだ？

「聖杯……一つ真理を説いてやる。現人神を舐めるな」

つまりは、輒に縛られないし超越者と模倣神の名を冠する男にとって論理は関係ないということだ。既にこの世界は一度来ている（ロジック）……の。術理も理も模しているがための超越なのだ。

そして、再びここに現人神の所業が顕現する。

「Die Sonne toent nach alter Weise
In Brudersphaeren Wettgesang.
《日は古より変わらず星と競い》

Und ihre vorgeschriebene Reise
Vollendet sie mit Donnergang.

《定められた道を雷鳴のごとく疾走する》」

そうだ、超高速で駆け抜ける。総てが止まって見えるほどに

呼応していく大氣中に存在するエレメントたち。彼らは現人神の所業に対して何の反対も存在しない。それが意図する意味とはすなわち、彼に過ちがないということに他ならない。

魔力を大気のエLEMENTたちに分散させ、同調率シンクロをさらに高めていく。

方陣の前で渦が巻いていき、大気の風が彼に祝いの歌を紡いでいるように心地よい風がそこから送られてくるのだ。

「……なんと。エレメントさえ自在か、我が主は」

瞳目するランサーは静かにそう愕然としていた。もはやご都合もここまでくれば至高というもの。面白い劇場を盛り上げるのならば、至高の配役を配置するのが良いもの。配役を剪定するのは神。そして、選ばれた者たちは王に仕える騎士ということ。つまりは、彼の手足なのだ。

後ろで息を飲むランサーを無視して、朗々と詠唱は続く。

「Und schnell und begreiflich
 schnell In ewig schnelllem Sphae
 renlauf. 《そして速く 何より速く 永劫の円環を駆け抜
 けよう》

Da flammt ein blitzendes Verh
 erren Dem Pfad vor des Donner
 schlags; 《光となって破壊しろ その一撃で燃やし尽くせ
 》

「この身が閃光となろうとも構わない。

「Da keiner dich ergrunden mag,
 Und alle deinen hohen Werke 《そ
 は誰も知らず 届かぬ 至高の創造》

刹那は麗美。美しいからこそ再びお前の渴望を見せつけてやろう
 ではないか。汚れた泥という名の希望より、お前の渴望せしなを刻ませる
 ことを許せ。

「Sind herrlich wie am ersten T
 ag. 《我が渴望こそが原初の荘厳》

破滅おわじを拒絶するために、この祈りを絶対不変のルールに変えよう。
 世界を不変なるものへと転じさせるために。

「Briah《創造》」

「Eine Faust ouverture《美麗刹那・序曲》」
唱えた瞬間、再び聖杯の慟哭は停滞した。それは最初のあの流出よりは威力は下がるが、それでも停滞を冠する以上、同じ属性の停滞は聖杯では抗えない。何故なら、聖杯は止まることに意味を見出すことは出来ないのだから。

体感時間の停滞。

「……なるほど。求道型で顕現するとかういうことになるのか。ツアラトウストラも随分とまた趣のあることをする」

確かに、現状和哉の体感時間は世界がスローに見えていた。停滞を好むその渴望を有し、そして発現させたのがこの具現化した能力とは。

「趣向が凝ってるな。まあ、俺はそれがまた愛おしいとも思うがな、と」

時が遅くなっていく中、和哉が藤井蓮の渴望に称賛を贈ると同時に右掌に乗せた二つの靈魂を自転させた。クルクル回る二つを見ながら、再び言の葉を紡ぐ。

「告げる。」

汝の身は我が元に、汝の身は我が権利。

聖杯に囚われし靈魂よ。その身、この世の理を唾棄したいのなら希え。

誓いとここに、制約を掲げよ。戒めを解き放ち、戦を駆け抜ける英雄たちよ。

汝らが翳す渴望を示すがために共に戦場を駆け一筋の閃光となるのではないか。

顕現せよ、我が身、我が総身を喰らいて力となせ！

黄金の双眸で再び力強く意思を込めながら力を込めていく。滾る神威は徐々に総身から滲みだしていき、漲らせる咒は脈動を高く脈動を打っていた。

そして、二人の騎士を顕現させたように、今再び黒井和哉はその

新たなサーヴァントを従えるために、再び顕現させる。

「出でませ！メディア、佐々木小次郎！」

脈動が高鳴り、そして鳴動していく。空気を伝播させて伝わるは
歓喜。己が命を聖杯ごときに歪まされてなるものか。

そうだとも。唾棄するのなら、我らが開戦の号砲と、先駆けの尖
兵として閃光となりて駆け上がろう。

そして、激しく空気のエレメントたちが一点に収束した瞬間、一
気に弾けた。

群青と紫の靈魂の球体が宙を舞い、螺旋を描きながら一個の集合
体が球体へと成り、その中へ誘われるようにして行き、そして……

ついに、再び神の所業がここに形を成し、創造されたのだ。

第十五話「解放」(後書き)

次回もなるべく早めに投稿できるようにしようと思います
では、また

第十六話「魔女と侍」(前書き)

久方ぶりの投稿です
深夜からすいません
では、どうぞ

第十六話「魔女と侍」

「さて……お目覚めかな。気分はどうかな？敗戦の英霊たちよ」
「……私を斃わたくしして何が目論見かと思えば、私たちを手足にするつもりなのかしら？あなたは」

「さてな……神代の魔女に悟られるへまをした覚えがないのだがな？」

「その槍兵があのような力を有しているなんて聞いたことがないわよ。どこの時代を探っても、神代の時代の槍兵なんて存在しないわ」

魔法陣の上で風が吹き荒れる中、先のランサーに刺突されて斃キヤスターした魔術師の坐に座していた存在、裏切りで知られるメディアが彼の身を糧にさせた黒井和哉は口論をしていた。

本来斃サーヴァントされた英霊はその霊格を聖杯へと帰させるのだが、和哉の介入によりそれを阻止し、記録されるはずの記憶はキヤスターの内
で留まっているということになる。

歪ませた結果、聖杯から除いたことよって発生したバグのようなものだ。

「やれやれ……花鳥風月を好む私としては、あのまま霧散したままでも良いと思っていた次第なんだがな。風情のない」

「アサシン、我が主の配慮だぞ。貴公とて私との闘いを存分に満喫し、そして誓いを立てた。その約定を違えるのか？」

「いやいや、それとこれとは話が異なるろう。私に異論はないぞ、ランサー」

魔女と主が口論をする中、それを見ていたランサーと再誕された佐々木小次郎ことアサシンがいた。腕を組みながらも互いに話す二人は互いに和哉を見ながら話し合っていた。

二人の今考えていることは、実に簡単だ。

黒井和哉……その存在の所業の数々に奇蹟を起こすその手腕にあ

る種の感覚を抱いていた。

強すぎるその男は万能であり完成された存在だろう。事実、狂戦士との戦いにおいてもその実力は見て取れた。しかし、同時に此の男は孤独であり孤高なのだと瞬時に悟っていたのだ。

「縛鎖から解き放つことが出来る……聖杯を完全に下に位置させているということだ」

「彼の神秘そのものがまさかあの男からは俗物だとはな。皮肉なものよ」

魔術師が追い求めている聖杯。 神秘の器。 願望機。

長年追い求めているそれに対して、この男が振るうだけで薙ぎ払うその行い。 聖堂教会としても魔術界としてもあり得ないと、理解できないと慟哭するに違いない。

「堅牢な守りを有し、絶大な力をふんだんに発揮するその在り方」

「世の魔術師たちには出来んだろうな。 力を持って余すこと無く行使できるのは魔法使いと呼ばれる存在だけなのだろうな」

魔術師を超えた魔法使い。 神秘を行える存在。

サーヴァントであろうとある程度の情報は聖杯から受け継いでいた。ならば、聖杯から何とか取り除いたからこそ現状が成立している。それを再確認した二人は、未だに続くキャスターと和哉との口論を見守っていた。

第十六話「魔女と侍」(後書き)

寒いですよね……嫌だ嫌だ。冷え症には堪える所業ですな
では、また

第十七話「言峰」(前書き)

どうも、おはようございます
今から再スタートと行きます
では、ごきげん

第十七話「言峰」

「……この異変にこの変動。聖杯が軋みを上げている。果たして、誰がこのような出鱈目をしたものか」

「我が知るものか……だが、この所業は目に余るな。我の嫌うモノと同じではないか」

「うむ……お前ほどの男が嫌悪するということは、もしや神か？」
「考えることさえ烏滸がましいが……恐らくはな」

深夜遅く会談している場所……言峰の名を冠する教会の内部の奥において、この言峰教会の名を冠している神父、言峰綺礼とソファに凭れながらワイン片手にグラスを傾けている黄金の金髪をした赤い双眸をした若い男が互いに向き合いながら話をしていた。

この凭れている男こそ、第四次において参陣した最凶の切り札である弓兵の座の英霊、古代最古のウルク王、英雄王ギルガメッシュその人物に他ならない。

「時に、言峰よ。既に聖杯戦争は始まっている。駄犬はまあ良しとしてもだ。少タイレギュラーが多発し過ぎているな。よもや聖杯の軛を解き放つ輩がいようとはな」

存外面白い、そう笑みを浮かべている黄金の英霊は、その実その賊を殺したくて仕方がないのだ。

それを察した言峰はため息を吐き、

「我が師がお前を拘束しきれなかった所以はまあわかるが、そいつを殺す前に、少々調べておきたいことがある」

「ほう……？この我に指図をすると？貴様、我を誰だと思おておる？」

「言わずとも理解しているが、その男よりもあの衛宮切嗣の後継者の動向を調べておきたい」

「なに故だ、言峰？所詮は雑種であるうが。泳がせておくのが良いだろう」

ソファアーに凭れながらも黄金のサーヴァントの麗貌は崩れない。黄金は不変。故に、それが崩れるような不手際は起こらない。

そも、サーヴァントは既に死した存在。年を取るとかの問題ではないのだ。

「まあその真相はおいおい説明しよう。まあ私の言いたいことはだな……」

「言わずともわかるぞ、言峰。お前の考えることは終始一徹。よろう、王たる此のオレに対してのその進言、此度は許そう」

傲慢、驕慢。それを合わせ持つ英霊は最後のワインが入ったグラスを傾けてからそう言い放ち、そのまま静かに消えていった。

だが、

「言峰よ……この我を興^{おし}じさせよ。お前の働き、魅せてもらうぞ」
「無論、そのつもりだ」

虚空へ消えていったギルガメッシュの最後の言葉に言峰は当たり前だと頷き、それが最後に英雄王は完全に気配を絶った。

後に残るは重苦しい威圧感に満ちた空間と怨嗟に満ちた教会だけだった。

第十七話「言峰」(後書き)

ではまた、投稿しますので
では、また

第十八話「黄昏」

地上より隔離された空中で魔法陣の上で事の成り行きを見守っていた和哉は、それぞれのサーヴァントたちに魔力提供と事の説明をしていた。

己の存在。己の在り方。これからのこと。

それを総て説明した後、キャスターは納得行かないと不満不平を零していたが、他のアサシンである佐々木小次郎にデイルムツド及びランスロットは頷いていた。

「なるほど……主の行動の不明瞭だったのがようやく解消されたな」「道理で……強いことは強いけど、私たちよりも高位な存在じゃない」

「幽霊である私では胡乱な評価しか下せぬ故、なにも言わないほうが無難であろう」

「……………」

各々が己が心境を言う中、相も変わらずランスロットは沈黙を貫いていた。怒りによる沈黙なのか、それとも納得したがための沈黙なのか定かではないが、言えることは理解はしているということだ。「しかし、であるならば我らを聖杯から切り離したことで既に主が知るモノとは異なるのでは？」

「その通りだ。既に混迷としているんだ。俺の既知とは明らかに異なる変異と未知が発生するだろう。しかし、なればこそこの俺が此の世界に介入した意義が見いだせるというもの」

「やれやれ……我が主は随分と奇特な方のようにだ。だが、面白い。私も乗ったぞ、主よ」

「そうね……宗一郎様に手を出さないようだし、少々興味があるわね。まだ可愛いものがたくさんあるのなら、あなたとの地獄巡りも悪くはないわね」

「風情がある……その話が真なら女狐が素直になるのもまた一興。

是非お供させてもらおうぞ」

デイルムツド、キャスター、アサシンは各々吟味してから和哉と同行することを誓い、黙っていたランスロットはそこでようやく重い腰を上げた。

「マスター。一つ我が問いかけにお答えください」

「なんだ、騎士よ」

「既知を知るあなたなら、我が王が最期はどのようにして生涯を終えたのか、ご教授して下さい」

「……………」

当然といえば当然の質問だ。逆に、今の今まで静かに同伴していたのが不安なぐらいだ。ちょうどいい機会だ。

「分岐点によって生涯の終え方が異なるが、内二つは満足した笑みを浮かべていたな」

「……………そう、ですか」

それは安堵だったのか。鎧の下から漏れた清音に和哉は何も言わずに黙し、再び己がサーヴァントとなった者たちに視線を向ける。

「さて……………俺との魔力パスによって同時に送り込んだ情報で理解したはずだ。」

この冬木市は格別な霊格を有している霊地……………そして、贄を捧げることで解放される神聖な場所もまた七力所。贄を捧げることで開放されるスワスチカを開かせないと同時にあの英雄王を何とかしなければならぬ。しかし、現状で槍兵・騎士・弓兵・狂戦士・イレギュラー（黄金の弓兵）……………この五騎が生存を掛けて誇りを、凌ぎを削り合うはずだ。

俺たちは戦局を見極めて介入するぞ。聖まあ杯が黙っているわけではないだろうが、問題は残っているライダーだな。セイバーに関してはまあ目を瞑るとして、バーサーカーの主であるイリヤスフィールとは今晚会いに行かなくてはならぬ。ホムンクルスの保護も兼ねて今晚行かないと危険だしな。

黄金の弓兵はあの人造人間を、ホムンクルス聖杯の器を虎視眈々と狙っている

んだ。イリヤの心臓を他者に植え付けてしまえば疑似的な聖杯が完成する。それを見逃すのは愚の骨頂だ。故に、俺がこの世界の法則と理と運命を捻じ曲げるだけだ」

状況は混乱。常に自転を繰り返し、運命は定められた道筋の上しか疾走できないでいる。

彼女は元来聖杯の器として生み出されたホムンクルス。アイリスフィールが衛宮切嗣との間に生まれた子供であるが、所詮はそこまでのこと。定められた道を雷鳴の如く疾走し、そしてそのまま栄光という名の死を賜る宿命にあるのだ。

「行くぞ。イリヤと会談し、まずは味方に引き込む。後に遠坂凜とも話を済ませるつもりでいるのだが、ギルガメッシュの介入が気がかりだ。キャスター、済まないが念には念で探知魔法を仕込んでおいてくれ」

「分かったわ」

彼の後ろでいるローブを羽織った魔女は頷き、即座に行動に移すと同時に和哉は冬木市を睥睨してから、呟いた。

「……マルグリット。総てを包むことは出来ないが、この俺が出来る範囲で救ってみせる。だから、見ていてくれ」

見ていてくれ黄昏の姫よ。

破壊と超越の物語を。

模倣し完遂させる奇蹟を。

総てを巻き込んだ終焉と始まりの物語を。

黄昏の浜辺から見守っていてくれ。俺たちの女神よ。

第十八話「黄昏」(後書き)

ではまた

第十九話「アインツベルン城」

生い茂る森。木々が真夜中の道を遮り、暗黒の闇がより不気味さを増幅させている。

常世の闇……と称しても分かりづらいだろうから、簡単に述べるのならこれは要するに暗闇の世界。

光が遮断され、樹々という生い茂る森林の中に一匹の仔羊が迷い込んだと思えばいい。

童話や民話などではそういった類たぐいの話はいくらでもある。称して表現するならば適切だろう。

だがしかし、一面の樹海で覆われたこの外界の内部で招きこんだのは一匹の仔羊……などではない。

例えるなら、獅子。例えるなら幻獣種。

敢えてこの樹海に吞まれたふりをしているのも事を穩便に済ませるため。ここで既にあいても勘付いているだろうが、その相手が獅子や仔羊などではなく、真正銘本物の怪物を、現人神を招きこんでしまった以上、先のバーサーカーとの一戦もあり手出しは出来ない。

それ故に、アインツベルンのホムンクルスは静観しているのだ。

つまりは、互いに……というよりも、イリヤ側が手を出せばまたもや人外の戦争が始まることになる。そうしたら、如何に魔力で編まれた結界があるとはいえ、アインツベルン城もタダでは済まないだろう。

魔力が幽かに漂う深淵の森の中、ついに和哉はその目的地を視認した。

「……なるほど。御伽噺に出てきそうな城だ。西洋風っていうのもありだが、アイリも何を考えたのか真まことに不思議だ。アリスに感化されたのか？ いや、向こうの城の形が住み慣れてよかったのだろうか」

深い森の中に隠れた古城。西洋風の形式で築き上げられた古びた城は北欧などでありそんな年代を思わせるほどで、デカイ。

これが、第四次聖杯戦争でアイリスフィール・フォン・アインツベルンと魔術師殺しの衛宮切嗣が根城にしていた拠点城。

皮肉なるは、生まれたイリヤもホムンクルスであり、聖杯の器として仕組まれたという点ぐらいか。

「ま、物語は佳境に差し掛かる一歩手前だ。ホムンクルスの元には主演である狂戦士に侍女のホムンクルスが二体。さてさて、どのような手荒い出迎えがあるのやら」

実に愉しそうに和哉は嘯きながらも神々しい金色の光を左人差し指に収束させていた。これを放てばどうなるか……実力を見ていた相手に対しての脅しでもある。先に相手の実力を知っていれば当然警戒するのは当たり前だが、その前提条件は和哉に効くはずがない。叡知を掴み、破壊と超越を司り、回帰させながらも刹那を愛し、万能が故に全を包み込む慈愛の化身。

それが現人神であり万物の頂いただきに立つ黒井和哉にはかならない。闊歩しながら歩き、大きな門構えの前まで来た。

(……警報装置も魔力探知もなければ結界もない。となれば、開けた瞬間にバーサーカーの大剣の餌食というわけか)

単純にして強力。相手がそもそも強いのなら、加減は不要。己が最強のサーヴァントの宝具とその力を信頼しているが故の策だろう。無謀に見えてもこれは“十三の試練トリップハンズ”を有するヘラクレスだからこそ出来る荒技だ。最優のサーヴァントである騎士王であろうとこれは出来ないだろう。

「面白い、試してみる……返り討ちだぞ」

その奇策を前に和哉は不適な笑みを浮かべてそんなことを思いながらも左人差し指をドアに向けて無造作に放とうとした瞬間、重い音を立てながら青銅のドアが開門された。

「なに……？」

訝かしみ響める和哉を余所に、扉の向こうには狂戦士ではなく、

可憐な少女がスカートの裾を摘んでお辞儀をして頭を下^{こぶ}げ、その傍らで両脇には給仕服を着た二体のホムンクルスがいた。

「ようこそ、アインツベルン城へ。歓待するわ、現人神」

雪の少女、イリヤスフィールが純粹な笑みで和哉を見上げていたのだ。

第十九話「アインツベルン城」(後書き)

次回も速めに投稿する予定ですので、どうぞ閲覧していただ
き

第二十話「イリヤ」

「……………」
「……………」
「……………」

長い沈黙。王室間に案内された和哉はソファアに凭れながら対面するアインツベルンと一時も目を離さずにいた。

イリヤは常に笑顔を絶やさずにいるが、これが罠である可能性はデカい。甘い誘惑であることは確実だろう。

「どういうつもりだ、アインツベルン。下手な真似をすればそのメイド共とバーサーカーを殺すぞ」

「落ち着いてよ、お兄ちゃん。別に私は殺し合いがしたいわけじゃないわ」

「ほう……………？それは初耳だ。聖杯戦争は互いに殺し合うバトルロワイヤル。それを最優先に、率先してサーヴァントを殺しにかかる願望機の器候補であるおまえが違うだと？おいおい、否定はするな。この神眼を見くびると痛い目に会うぞ」

対峙しながらも和哉は神威を振るえる状態であった。現人神である和哉は同時に戦の神でもあるのだ。包容を司るマリイではなく、部類でいうならハイドリヒ寄りだろう。元々戦うことを主眼としている傾向もあり、戦うことに否定的な考えも思想もない。故に、このホムンクルスどころかバーサーカーさえも状況次第では抹殺するつもりでいるのだが……………

「もう、邪険にしないでよ。こっちに戦う意志はないんだって」
「……………」

邪気のない無邪気な瞳で和哉に微笑む少女に和哉は言葉を紡ぐのをやめた。

（策略……………ともあれば、籠絡か。女としての部分で俺を陥落させる

気が。淫売パヒロンの所業だぞそれは。貞操云々ではなく、俺を味方に付ければ万事解決と、そういうことか)

和哉は完全に未知であることは知っているし、それが故に警戒している。彼ならば無傷でここから出ることなど造作もないのだが、この状況は有り得ない。どの道を探ろうとこのような展開はない。なんだ、これは？

「……うふふ。困惑してるね、お兄ちゃん。大丈夫だよ、イリヤはお兄ちゃんの味方なんだから」
「……な、んだ、と？」

またしても有り得ない。このアインツベルンの殺戮マシーンを引き連れた願望機の器が俺の味方に付く？

「どういう策があるかは知らないが、そのメイド。そして聞いているのだろうか？ヘラクレスよ。説明してもらおうか。状況次第では卿たちの主はここで死ぬことになるぞ？」

「……」
だが、脅してもこの侍女二人は静止したまま動こうとせず、霊体化しているバーサーカーも動く気配がない。

そんな彼女たちの状況を見極め、和哉は現人神としての冷静さをここで取り戻した。

「失礼……だが、妙であるな、イリヤスフィール。何故に此の俺に負担する？聖杯が望みなのだろうか？ならばこそ、ここで邪魔者である俺は排除すべき対象ではないのか？」

任務遂行のため、宿願のため。そのためにアインツベルンは生かされている。それは何も異ならない。そして、だからこそこの少女の奇行は目に余るものがある。

和哉が何重にも考えていると、不意に少女の貌が和哉の真正面に来ていて、それに気が付いた瞬間、

「……………ッ!？」
唇を交わしていた。

第二十一話「擦り切れた記憶（おもいで）」（前書き）

どうも、久方ぶりです

寒い中、私も負けずに進行をする予定です

では、今宵の恐怖劇グランギニョルを始めようか

第二十一話「擦り切れた記憶（おもいで）」

これはそう……雪が降りしきる冬の中。

雪が支配する凍結された純白の世界。異物の侵入を許さない穢れなき黄金白書。

穢れがあればそれを浄化させ、白へと変じさせる世界。

そんな世界の中心で男は一人の少女を胸元に抱き寄せながら慟哭していた。悲しみ、怒り、憎悪。それらが巡り巡り……その果てに忘却した男がいた。

少女は分からぬと寂しそうに涙を一筋流す中、男は「なんでもないよ」と優しい柔和な笑みで微笑みながらもその涙は血で染められ、この白き白景色を真紅の血で色彩を彩らせていた。

そう……この少女を救えぬことへの罪悪。縛めを解けぬ己の無力さを痛感させられ激痛の焔で焼かれることを願いながら、そのまま男は少女を置いてどこかへ去って行った。

これはまさしく、黒井和哉が救済するはずの少女を救えず己を恨み、己が渴望をより堅牢にした最初のきっかけだったのだ。

「……ッ」

邂逅した刹那、黒井和哉は苦悶に満ちた表情を浮かべながら強く拳を握りしめて血を出すほど強く、より強く握りしめていた。それを忘れぬように、決して忘却しないようにと、これはそうした意思表示。

「…… アインツベルン、の……雪景色の少女」

「……思い出した、お兄ちゃん？そうだよ、イリヤだよ。思い出せなくてごめんね」

俯いていた表情を上げて見上げるとそれを優しく柔和な笑みで受

け止める可憐な少女がいた。あの冷酷な少女ではなく、魔術師としての彼女ではなく、願望機の器としての彼女ではなく、黒井和哉が知りうる“あの”少女に他ならない。

並列世界において紅月カレンに次いで衛宮士郎同様に彼女によって自我というモノを、守るモノの刹那を覚えさせてくれた重要な人物。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

黒井和哉をある意味で絶望の淵に追いやった人物にして、彼の矜持を守護した聖霊なのだ。

「……何を謝る、謝るのはむしろ俺のほうだ。救えなかった、こんな無様な俺を何故思い出した！何故ここに来て俺を抱き止めようとする！？こんな俺に慈愛を向けるな！アインツベルンの器！！」

思い出した包容の守護者を前に、和哉は己が怒りを、神としての感情ではない。真正正銘、黒井和哉本人の感情の発露。これは今の今まで溜めに溜めていた本人の偽りない本心なのだ。

「……………お兄ちゃん。一人で抱えていると潰れちゃうよ？」

弾劾する和哉を前に、イリヤは心配そうに声をかける。彼女が兄と慕うのは衛宮士郎だけが、ここに例外は存在する。

並列世界で無力で非力であった和哉が守るとして守れなかったイリヤは同時に和哉との出会いを経て、他世界である己との共有を可能にしたのだ。であれば、これは必然的に和哉と同等に己の思考や記憶を共有し繋げているということに他ならない。

人であった彼は純粹にイリヤを守ろうと奮闘するもそれが出来ずに彼女は予定通りの聖杯の器となり、それをきっかけに彼は模倣の起源が覚醒し、そして各世界を歩き回り、能力に力を入れたのだ。

此の少女がいたからこそ……などと、皮肉じみていて実に諧謔的だ。

無力な己を目覚めさせたのは紛れもなく彼女だ。救えなかったのにそれが好機となって現人神として目覚めた。滑稽ではないか。

「潰れはしない……カール・クラフトを殺すまで俺が止まることはない。そして、を殺すんだ。此の手で」

最後に言った瞬間、彼の双眸は現人神としての本性を垣間見せた。そう、彼が現人神となり、その果てになにを渴望したのか……水銀の王を殺す？それは前提条件に過ぎない。奴を殺したその後こそが彼が真に己がやらなければならない怒りの日フェイス・イレなのだ。

「……うん。イリヤ、分かるよ。あの子を救うんでしょ？だから、イリヤも一緒にいくよ。お兄ちゃんは一人で背負い込んだじゃうから、イリヤがその重荷を荷担してあげるよ！」

仰け反って胸を張るイリヤは先の戦いの魔術師ではなく、彼が知る方のイリヤで間違いない。間違いないのだが、ここで疑問符が上がる。

「しかし、いつ記憶が戻った？俺との交戦中に思い出したわけがないだろう。俺の神眼は心の中さえも見透かす。それ故に不可解だ」

最大の疑問。それは、この雪の少女がいつその記憶が共有したかだ。他人のフリをしても和哉の神眼は欺けない。魔眼にもいくつか種類があるように、和哉の神眼は状況に応じて変化することができ、常に彼が発動させているのは他者の心を見透かす力だ。戦局の読み合いでは確実に有利に立つ必要性があり、それ故に、この神眼は和哉の基礎にして最大の技能なのだ。

欺く？騙す？無理だ、不可能だ。精神攻撃やら揺さぶる類のモノに和哉は屈せず、折れもしない。現人神を舐めているのならば破壊しよう。それこそが、慕情の愛だ。

そんな彼を古くから知るイリヤは柔和な笑みで年不相応に艶やかでありながら彼の疑問に頷き、

「私の記憶が前の御魂と重なったのはね、バーサーカーとの戦いの後だよ」

「直後か？」

「うん。しばらく経過してからだけどね」

正面に座していたイリヤは立ち上がり、スイッ、と彼の横のソフ

アーの座席に座り、凭れ掛かるようにして小さな頭を和哉の体に押し当てた。

「今の今までごめんね、お兄ちゃん」

「だから、何で謝るんだよ？」

「謝罪だよ、今までの」

これ以上は互いにもはや言葉は必要ないのか、イリヤのそれを最後に二人の会話は終了した。言葉を交わさずとも互いに和哉が神になる前から見知っているのだ。これ以上は無粋というもの。

「ねえねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

凭れ掛かるイリヤは不意に声を掛け、和哉はそれに呼応した。

「なんだ」

「此の後はどうするの？筋書き通りなら、間違いなくイリヤの元に来るはずだよ。あの男が」

あの男……名前を出さずに揶揄するだけでも十分に事足りる存在。それは分岐する話の中でイリヤの心臓を抜き取ったあの黄金のサーヴァント。

その銘こそ、第四次聖杯戦争において遠坂時臣のサーヴァントにアーチャーアーチャークラスクラスとして弓兵の座に座して他のサーヴァントとは別格の存在と力を保有していた古代最古の英雄王、ウルクの王。

ギルガメッシュ。彼ら人間にとってはある意味で最凶最悪とも呼べる人外そのもの。ヘラクレスもサーヴァントとしては格別ではあるが、あれはそもそも霊格を有しながらもその有する宝具は明らかに人知の埒外にある理だ。

あれは唯我独尊にして天上天下と謳う暴風。歩き終えたが最後、その背後には轍さえも残さない天災、もしくは人災そのものだ。聖杯の器でもあるイリヤを触媒にして総て己がものと豪語する聖杯を成熟させる計画である以上、確実にこちらに攻撃を仕掛けるのは明白。

現状で見れば因縁の対決でもあるアルトリアが存命しており、

あれは終始己がものにするまでその進軍は止まらないだろう。セイバーを囚にすれば意識は多少ズラせるものの、あの「王の財宝」ゲイト・オブ・バヒロンがある以上、一太刀たりとも喰らえば致命傷だ。バーサーカーも天の鎖ことエルキドゥが天敵であるからには囚われれば槍衾にされるのが目に見えてわかる。

「ああ……そのためのこいつらがいるんだ。護衛の人数は既に十全言峰綺礼は出し抜けないが、退かせるさ。安心しろ、今度こそその楔を俺が引き千切ってやるさ」

「……うん。ありがとう。大好きだよ」

瞬間、和哉の中で駆け巡る記憶（思い出）がリフレインされる。

『 大好きよ、和哉 』

『 死なないで、和哉 』

『 生きて、和哉！ 』

『 どうしてよ、和哉！？ 』

ソイズ 雑音。 ソイズ 雑音。 ソイズ 雑音。

擦り切れた無数の記憶おもいでの再生。縁を結んだ数々の思い出きおく。太古の昔からあるかのようなその焼き回しは、和哉という存在を裏付けるモノであり証明だ。

彼女たちとの邂逅はまさしく大切な閃光せつなであり、それ故に替えが効かないモノなんだ。例え何万、何億という命を対価に支払おうともそれは元の質量にも同じ者にもならない。当然だ、同じ人物を生き返させようともそれは同じ人間ではなく、死者だ。

死んだ者を甦ソンビえさせる？ 死者に価値があるとでも？

戯うつけけ虚うつけが。死んだ者は戻らない。死んだ死者はそれ故に意義があり意味を見いだせるのだ。それを再び生き返させる？ 悦に入っつて自己満足するのなら己が鏡を見て抱きしめればいい。

死は一度きり。故に、激しく生きる意味があり、その命を燃え尽きさせるのならば意味を見出し、疾走するしかないだろう。

聖餐杯、獅子心剣、淫売はまさしく塵芥であり、黒騎士はきちんとそれを理解している。あいつは一度死んでおり、それ故に「死」そのものをよく知り、切にその終わりを希うのだ。

そこまで思い馳せていた思考回路を正常化させ、イリヤを見据えた。

「俺はまた過ちを起こさぬ確率はないんだぞ？姉上」

「ふふん！カズヤは私の弟だもの！弟を助けてやるのも姉の努めだものね！」

胸を張りながら言う少女は幼くも和哉を抱き止めた大切な想い人だ。故に、咎人であろうと和哉は生涯守り続けるとこの胸に強く刻みつけたのだ。

そこで黒井和哉は神として、男として折れ、黒井和哉としての笑みを浮かべた。

「わかつたよ……降参だ。姉さんは俺が救い出す、必ずだ。ヘラクレス、すまなかつたな。あの戦いは俺が愉しむものであつたがために少々辛辣な言葉を吐いた。許してくれ」

『問題ない』

短くも、しかし力強く言うバーサーカーは霊体化していても笑みを浮かべているのを見て取れた。

『驚いたな……彼の大英雄が狂化して尚あのような笑みを浮かべるとは』

『凄まじ過ぎて言葉が出ないわね』

『出ているではないか、女狐』

『人の揚げ足取るんじゃないわよ！』

『人ではなく魔女で英霊であるがな』

和哉の守護霊状態にいる彼らもやはり驚きを隠せないでいた。

それはそうだ。狂化するということは理性を犠牲に差し出すということだ。それは英霊サーヴァントとなる故に設定された決まり事なのだが、かつて勝利された剣で刺し貫かれたこの大英雄は理性を取り戻したのか？刺した騎士王と投影した少年と僅かな刹那に話していた経緯と

いう過去がある。これは恐らくその残滓が世界を渡って流れたがためだろう。

「リーズリットにセラ。済まなかったな、圧力を掛けてしまって」

「ううん……リズ、氣にしてない」

「私も同様に」

言葉数は少ないが、どうやら侍女のホムンクルスたちは和哉に対しての表情は敵対するものの目ではなく、見知った旧知の者を見る目であった。

「なるほど……おまえたちも少なからず御魂が重なったというわけか。しかし、なぜこつも多発するんだ？」

「恐らくだけど、お兄ちゃんがこの世界に介入したことで乱れたんだとイリヤは想うよ」

凭れながら次第にイリヤの幼く小さな身体を和哉の身体全体にすりすり擦り付けていく。

彼女の好意は有り難いが、今は話の最中。

「イリヤ。後でな。まずは話し合おう」

「……ふん。まあいいわ」

つままない、と言外でソツポ向く彼女に溜め息を吐いてから、再び話を始めた。

「さて……イリヤ。バーサーカーは今のところギルガメッシュと当てるには少々、というか神格を有する以上、戦わせるのはお勧めできんぞ」

「うん。私もリンみたいに馬鹿じゃないわ、バーサーカーをむざむざ殺させるような自殺志願者じゃないわ。ランサーは疾いだけで大丈夫だけど、あの蛇嫌いだわ」

ここで蛇と称されるのは二人おり、その内の一人とはキャスターの元マスターこと葛木宗一郎であり、ここで出てくる蛇を称するサーヴァントはたった一人。

騎士王ことセイバーでもなければアーチャーでもない。となれば、必然的に残るのは一体。

間桐桜のサーヴァント、ライダー 騎兵の坐に坐す女、メドゥーサ。

ギリシャ神話に名高いゴルゴン三姉妹の末妹で、その名は「支配する女」を意味し、諸説通り彼女の両目には石化の魔眼が宿っている。

あの瞳に睨まれば、抗魔力を宿している和哉や魔眼殺しを有する者ならば対抗できるが、他は抗魔力があろうと重圧をかけられる戦いにおいて重圧を掛けられるということは、重課であり死に直結することを意味する。

故に、色んな意味で困っているともいえる。

「まあそうだな……いけ好かないのは俺も同じだよ、姉さん。しかし、メドゥーサを殺すのは一向に構わないんだが、問題はあの内向きの間桐桜だ」

「うーん……確か、リンの妹なんでしょ？なら、まずはリンをこちら側に付かせないとまずいよね？」

「だが同時に、衛宮士郎がセットだぜ？姉さん、まだ衛宮士郎を諦めていないんだろ？なら」

「シロウに関しては確かに諦めていないけど、私はもう決めたもの。もう知らない私じゃない、あなたのよく知るイリヤだよ。シロウに関してはもう縁を切ることにしたの」

それは目を開く衝撃告白だ。イリヤは衛宮切嗣の養子にして落とし子である衛宮士郎を殺すつもりでいたはずだ。まあ多少なりとも事情はあるものの、イリヤが終始執着していた士郎から縁を切るといふのは、どの分岐点であろうと有り得ない発現だ。

この事象は間違いなく未知。今の今まで見たことのない既知ではない真なる未知。彼が模ってきた既存の世界にはない新たな一筋の道標。

ソファアに凭れかかっている和哉はそこで微かに笑みを浮かべて、次に指を弾き鳴らした。

すると、和哉の手元にはワインが入ったグラスが現出していた。

「姉さん。俺から一杯、貰ってくれるかい？」

「あら？魅惑チャームの魔術でも仕込んでいるの？も……おませさんなんだから、カズヤは」

「違うよ、姉さん。これは姉さんの選択したその道に対しての少しばかりの感謝の印だ。俺は未知を欲すると同時に総てを慕情の愛で破壊し、法則や理を唾棄しながら疾駆し疾走する。その果てに俺は最後に総てを包み込む。」

あいつらから学ぶことは多数あった。これらはもはや神としての俺にとってには必要不可欠。掛け替えのない基なんだ……まあ、水銀の無間に繰り返すのはどうかと思うがな」

そこで肩を竦めて言う和哉に微笑を浮かべてイリヤは和哉からワインの入ったグラスを受け取り、優雅にゆっくりと数回手首を捻ってから風味を感応して、そして喉に通した。

幼いながらも今の彼女は世界のイリヤにして和哉が知るイリヤスフィールなのだ。精神年齢は間違いなく上ではある

「カズヤ」

「なんでもない」

しかし、そんな考えも彼女の飲み干してから睨まれたその赤き双眸の前に、和哉は視線をずらして謝罪した。今の今までの和哉らしからぬことではあるが、彼女を前にして現人神として振る舞うことは出来かねぬことだ。

「……仲いい。良いこと」

「ええ、仲睦まじくて私も安心です」

「……………」

そんなまるで本当の姉弟のように振る舞う二人を仕える侍女のホムンクルスであるリーゼリットとセラは無機質な状態から僅かに表情を歪ませ、霊体化しているバーサーカーは無言のまま彼らを見ていたが、

「さて、ここまでのようだな姉上。どうやら、招かざる客人が来たようだ」

爆発と轟音と衝撃波が突拍子もなくアインツベルン城全体に響き渡り、地響きを起こしていた。

しかも、この城の内部で溢れる殺気と闘争の香り。魔力の流れに荒れ乱れ狂う魔力の奔流。

そして、確認される魂の輝きは

「黄金……か。やはり、邪魔者である俺を排除しに来たか、ウルク王め。ランスロットが何とか足止めをしているが、ここにいてくれ。リズ、セラ、ヘラクレス。姉さんを頼むぞ。俺は迎撃に移らせてもらう。衛宮邸に行くのは後で」

用件だけ伝えると、和哉はソファから立ち上がると同時に彼の装飾品のように今の今まで付けていなかったはずの彼のために詠られた衣装が顕現していた。

漆黒の美しくも荘厳な黒髪を翻し、詠えられたかのような黒き服にマントを靡かせ、首から垂れさがるルーンが刻まれたストラが輝きを増しながら、和哉は念のために言葉を出した。

「イリヤ……安堵しろ。ここには既に最強の守り手と守護者がいる。故に、待っていてくれ」

そう告げた瞬間、和哉は指を鳴らすとほぼ同時にその姿を消していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1564y/>

Dies irae -駆ける、現人神の刹那-

2011年12月18日11時53分発行